

K250.3

1

1b

文部省著作教科書

社 会 科 1



わ が 國 土

社 会 科 1



土

目 次

は し が き	1
前 編	
I わが國土の位置	2
II 日 本 の 地 勢	4
III 日 本 の 気 候	13
IV わが國土の開拓	20
後 編	
I 大陸に近い九州	27
II 瀬戸内海をめぐる地方	31
III 文化の古い近畿	36
IV 本州中央の高地と海岸地帯	41
V 廣い平野を持つ関東地方	46
VI 冷涼な東北日本	51

は し が き

日本の地図をながめよう。わが国土は、アジア大陸の東側に沿って並ぶ島々からなっている。日本は島國である。一方、わが国土内は、いたるところ山また山で、平野に乏しい。日本は山國である。

このように大陸の近くに位する細長い島國であり、山國であるわが國土の氣候は、簡單ではない。面積がせまいのに、わが國土ほど、地方によって氣候がいろいろと違うところは世界にもまれである。

われわれの祖先は、古くからこの島々に住んで、各地の特色をよく生かし、あるいはその不利なところをおぎなって生活のもといを築き、文化を発展させて來た。ところが、わが國には、明治以來、西洋文化が急速に取り入れられた結果、國民の生活のあらゆる方面に大きな変化がもたらされることとなった。

したがって現在のわが國民の生活を理解するためには、わが國土の自然との関係、明治以前の生活狀態やその後の変化などを併せ考えることが必要である。

1. わが國土の位置や自然には、どんな特色があるか。
2. わが國土は、どのように開發されて來たか。
3. わが國各地方の自然には、どんな特色があり、また、どんな産業や生活様式が見られるか。

(注) この教科書の統計資料は、おもに理科年表(昭和22年)による。

前 編

I わが國土の位置

大陸に近い島國 わが國土は、緯度の上では、だいたい何度ぐらいの間に横たわっているのであらうか。どんな島々が、どのような形になっているか、アジア大陸とは、どんな海によって、どのようにへだてられているか、などについてまず地図で調べよう。

せまい上に山がちなわが國土も、氣候にはおおむね恵まれて、人々の心身にもよい影響を與え、また、平野では作物がよく育つ。近海には寒暖兩流が流れて、水産もはなはだ豊かである。日本人はここを生活の舞台とし、長い間、大陸諸國の興亡をよそに、國家の存立を保つて來た。ことに文化の發達については、古代このかた、近くの大陸からあい次いですぐれた文化が傳えられることによって、どのくらい大きな利益を受けたか、はかり知れない。例えばどのような文化が、いつごろ傳えられ、それが現在のわれわれの生活に、どのように取り入れられているか、各自で調べてみよう。

ところで、もしもわが國土が、アジア大陸と陸続きであったとしたら、わが國はどうなっていたであらうか。大陸からの強い政治的勢力のために、國家を維持することができなかったかも知れない。更に、もしもわが國土が、寒帯や熱帯の海に位していたり、あるいは大陸から遠くへだたった離れ島であったとしたら、おそらくわれわれの文化は、今日とはよほど違ったものになっていたことであらう。

かくてわが國土の位置は、日本が長い間、國家を保持し、しかもすぐれた外來の文化を取り入れて、これを發展させる上に、あずかつて大いに力があつたと考えられよう。

一方、わが國土の位置には、文化の健全な發達の上に、何かつこうの悪い方面はなかったであらうか。例えば、長い間アジア大陸だけから文化を受けたことによって、かたよった文化がつくりとげられなかったであらうか。

また、わが國土の位置の關係から、西方の文化に接することが遅く、したがってその正しい認識や理解に欠けるところがなかったであらうか。ことに江戸時代の鎖國によって、せまい島國にとじこめられた生活を長く続けて來たので、その間に日本人の氣持が、小さくなってしまった傾きがなかろうか。

それに島國には、良きにつけ悪きにつけ、古い習慣や生活様式などが、いつまでも保存されやすいが、われわれの生活の中にも、今日の時勢に合わないものが残されてはいないであらうか。

新しい日本の位置 以上はおもに、これまでの文化の發達の上から見たわが國土の位置についてのことである。現代は世界諸國の文化の狀態が、昔とはかなり違つてしまつた。その上、科學の進歩につれて、陸に、海に、空に、すぐれた交通機關が急速に發達している。例えば以前には、世界の人々をわけへだてる作用が強かつた廣い海は、今日ではかえつて世界の人々を容易に結びつける公道となっている。それで、古い時代の人々は、あの廣い太平洋のかなたの國のことなどは、夢にも考えなかつたであらうが、今日のわれわれは、アメリカ大陸の國々も、そう遠いところとは思っていない。これに反して、例えば中華民國の奥地のように、距離は近くても、交通が不便な土地の方が、かえつて遠いような氣がする。

このようにさまざまな條件が過去とは違つた現代では、わが國土の位置の意味も、昔とはいろいろ變つて來なければならない。過去のわが國にとって有利であつた位置的條件の中には、今日ではその意味を失つてゐるものもあらう。また一方、不利であつた方面にも、新し

い有利な意味が生まれて来ている場合も考えられよう。

したがって現代の日本としては、その国土の位置の長所や短所についての考えを、以前とはだいぶ変えなければならなくなった。われわれは世界における日本の位置、世界と日本とのつながりについて考えなければならない。

わが國家を再建し、これからの世界の平和と繁榮につくすに当たって、わが国土の位置にどんな長所が考えられるか。またこれをどのようにして有効に利用することができるか。あるいは、短所にはどういう点があって、これを補うにはどうしたらよいか。これらのことは、國民が一致して眞剣に研究しなければならない重要な問題である。

課 題

1. わが國土が大陸に近いことの意味は、昔と現在とではどのように違っているか。
2. わが國土がアメリカやヨーロッパと遠くへだたっているために生ずる不利は、今日どのような手段で補われつつあるか。
3. わが國土の氣候から、日本人はいつも恩恵だけを受けて来たか。
4. 文化國家として発展するに当り、現在のわが國土の位置としては、例えばどんな点が長所で、どんな点が短所と考えられるか。

II 日本の地勢

日本は山國である。せまい國土を、けわしい山々がみだしている。合衆國でも イギリスでも、フランスでも、その國土の中で、平野のしめる面積の割合は相当に大きい。世界の文明國で、わが國ほど山地の多い例は、他にはあまり求めることができない。

わが國土は山がちであるのみならず、その地勢は実に変化に富んで

いる。いろいろな方向にならぶ山脈、方々に噴出している火山、山地の間にいだかれた多くの盆地、川の下流の低下な平野、屈曲の多い海岸。これらの組み合わせからなるわが國土の地勢の複雑さは、容易に想像できるであろう。それに、山脈・火山・平野・海岸それぞれの地形にも、また著しい特色がある。そして、このようなわが國の地勢の特色は、いずれもわれわれの生活と深い関係を持っている。

山脈 郷土附近からもいろいろの高さの山々がながめられることであろう。これらは平野から急にそびえるが、よく見ると、その表面は、大小たくさんの谷によってきざまれて、高低の変化は極まりない。もし、なだらかな

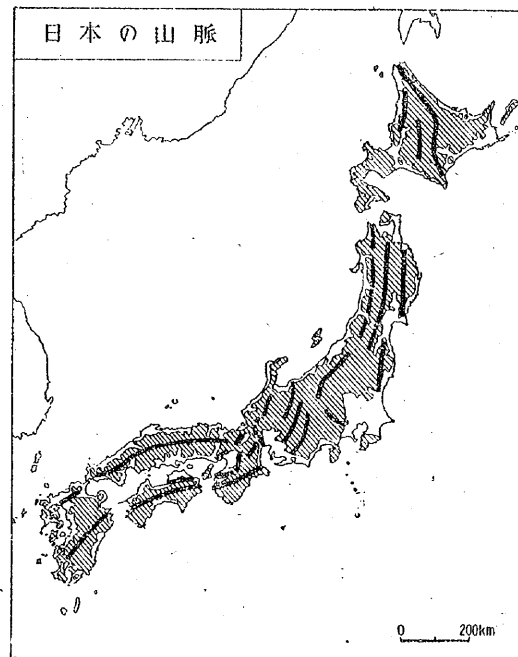
であったならば、斜面もそのまま耕地に利用できるであろう。とこ



ろがわが國の山地のように、急傾斜の部分が多い場合は、斜面の耕作も容易ではない。だから郷土の山地の斜面が、階段状に耕されているありさまを見るにつけても、郷土の人々が、いかに力を合わせて、その開拓に努力して来たかがしのばれるであろう。事実、わが國土ほど急斜面までよく耕されているところは、世界にもその例が少ない。それにもかかわらず、耕地は國土の面積の16%ぐらいにしか当たらないのである。

山の上の方は、ますます急傾斜となつてけわしく、このような山々が長くつらなつて起伏の著しい山脈を作っている。われわれはこういう山地をいつも見なれているので、山地といえは、どこでもこのようなものと思いがちである。しかしアジア大陸方面やアメリカやヨーロッパには、なだらかな山地も多いのである。

地図で見ると、わが国の北東部では南北の方向をとる山脈が並んでいるが、南西部では、ほぼ東西に走るものが多い。ところが本州の中央部では、山脈の排列が複雑である上に、ここはわが国で最も高くてけわしい山岳地方（中央高地）となっている。



・アンデス・アルプスなどに比べると決して高いとはいえない。しかし、けわしくて複雑な点ではあまり劣らないくらいである。それにわが国土の東側の海底には、深さ7000m以上に達する部分が長く続いているし、日本海にも3000m以上の深さの海底が広い面積を占めている。だから、もしこのような海底からわが国の山々をながめた

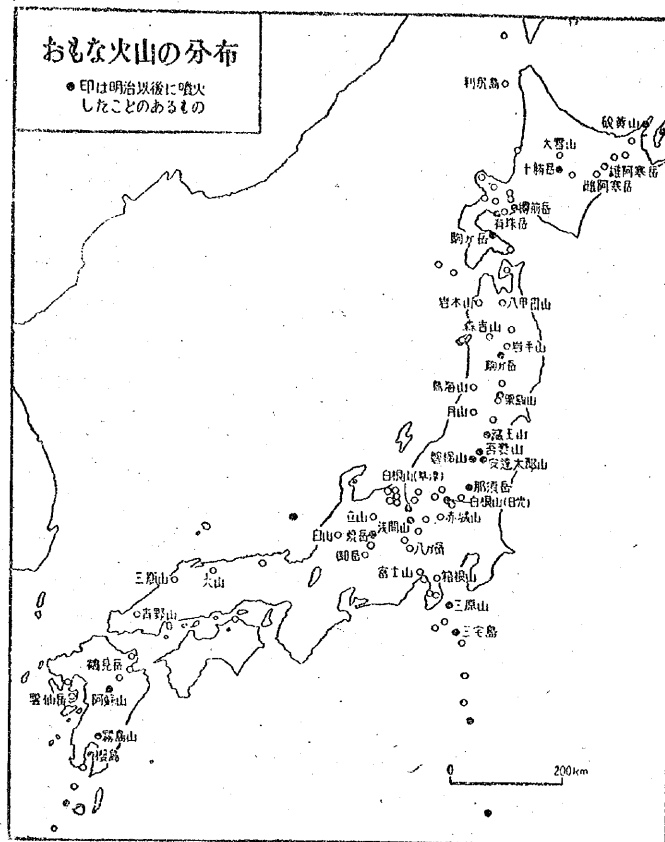
とすれば、実に雄大な姿を示し、わが国土全体が、一つの大山脈に見えるに違いない。しかも、わが国土は、太平洋をとりまく世界的大山脈地帯の一部分に当たっている。この地帯では、新しい地質時代に、土地の変動がはげしく行われ、そのために地勢がはなはだ複雑となったのである。

火山 わが国は火山国である。大小たくさんの火山が噴出して、ただでさえ複雑な山地の地形を、ますます複雑にしている。火山といえば、すぐ富士山の形を思い浮かべるように、わが国の火山には富士山型のものが多いが、つり鐘のような形のものも少なくない。また大爆発によって、山体がこわされた福島県の磐梯山のような例もあるし、有史以前に起った大変動によって巨大なカルデラを持つようになった阿蘇山・箱根山などもある。

地図によって火山の分布状態を見ると、火山帯、あるいは火山脈とよべるように、細長い帯状に並んでいる場合が多い。そこで、わが国では一般に、どんな火山帯が区別されているかを、各自で調べてみよう。

これらの火山は、もともと変化に富んだわが山地の風景に、一そう変化と美しさを與え、またその優美、あるいは雄大な姿は、日本人の氣持にどれだけよい影響を與えてくれて来たかわからないほどである。事実わが国の国立公園の大部分が、火山に關係の深い風景地であることは、この消息を物語るものである。更に火山のすそ野には、牧場や畑が発達して、特色のある土地利用も見られる。また火山に關連して、わが国には温泉が方々にわき出ている。そしてこれは、人々の保健・慰安に大いに役立って来た。

けれども火山は、われわれに災害を與たえることもまれではない。活火山の中には、時々大活動を行って、少なからぬ人命や財産を奪った場合もあるし、休火山でも記録を調べると、過去に大活動をしたこと

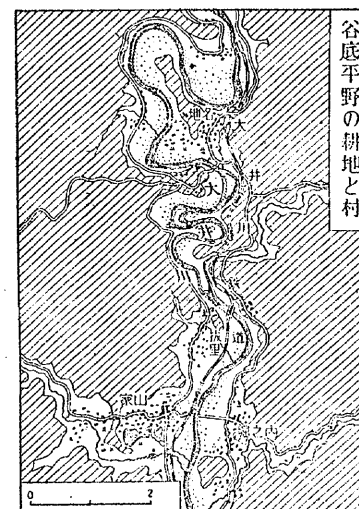


のある例も少なくない。それにわが国は、地震にもしばしば襲われる。そこでこれらの天災に対して、今後ますます科学的研究を進めて、その被害を少なくするように努力しなければならない。

河川・平野 国土が山がちで平野に乏しいことは、なんとしてもわ

われわれの生活に有利ではない。けわしい山地と深い谷とは、われわれの居住地をどんなに狭くし、また交通上にもどれくらい妨げとなっているかわからない。しかしながら、科学の進歩によって、こんな不利な条件の中にも、大きな利用価値が発見された。それは水力利用である。豊富な雨量に恵まれて、けわしい山地を流れくだる河川には、いたるところに急流や滝がある。わが国は世界有数の水力発電国である。

しかし、山地のなかにも、平野がないわけではない。谷に沿って、狭いながらも平らな土地がありさえすれば田畑が開け、人々が住んでいる。このような谷をのぼって行くと、急にあたりが開けて、そこに村

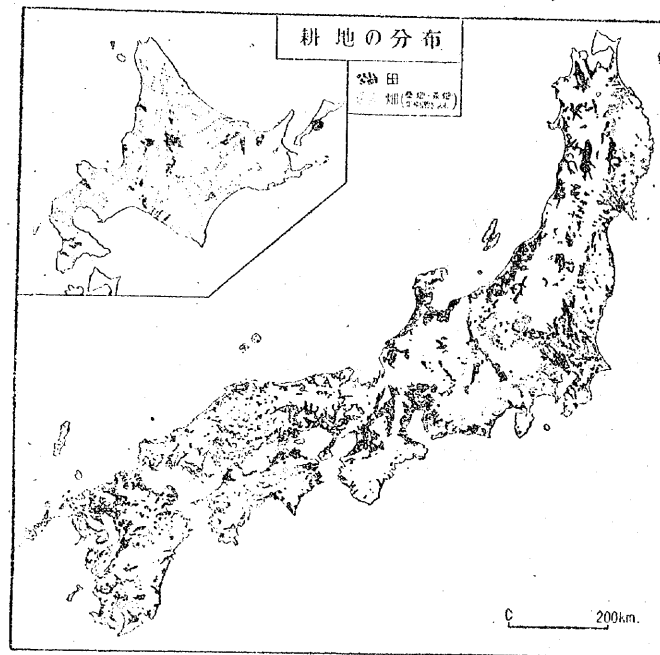


や町が発達しているのを見ることがあろう。土地の変動がはげしく行われたわが国土には、このような盆地が方々にできていて、これらは山がちな地方では、たいせつな居住地となっている。

日本の地図を調べると、盆地は各地方に見出されるが、ことに奥羽山脈の西側には数個の盆地が縦に並んでいる。また本州の中央高地に発達している都市は、たいいてい盆地の中心地であるし、近畿地方中央部の諸盆地は、古い日本文化の発展に重要な役目を果たして来た。

しかし、なんといっても、今日のわが国にとって最も重要な平野は

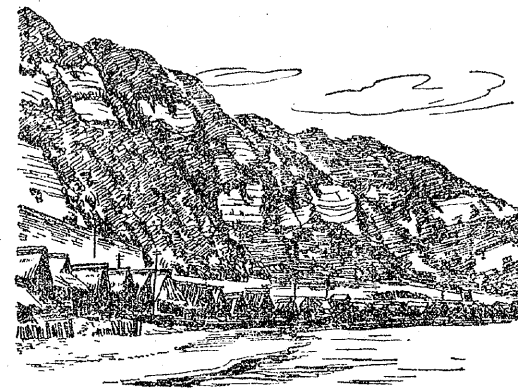
川の下流に位するものである。関東・石狩・濃尾・越後・筑紫などの諸平野は、わが国では大きい方であるが、その他にもどんな有名な平野が、どんな川の下流に開けているか、地図で調べてみよう。これらの諸平野は、よく耕され、都市もたくさん発達して、世界的に人口密度の高い土地を作っている場合が普通である。



以上のような平野も、面積の上からは極めてわずかにすぎない。それに、わが国上の複雑な地勢のために、大小の平地が離れ離れに横たわっている場合が普通である。だから、新しい交通機関が発達して交通が便利になるまでは、人々はそれぞれの居住地で長い間、たがいに

交渉の少ない生活を営みがちであった。その結果、それぞれの土地では、特色のある風俗や習慣がまもられ、それが今なお保存されていることも少なくない。郷土にはどんな例が見られるであろうか。また古い生活様式の中へ、急に外国の生活様式が取り入れられて、両者がまだよくとけ合っていない例はないであろうか。

海岸 島国日本は、海岸線の長いことも世界有数である。山がちなわが国では、山地が海にせまっている部分が多い。しかし、わが国の海岸は、昔から交通上どんなに重要な役目をして来たかは、おもな街



親不知の岩浜

道が海岸に沿って設けられて来たことから明らかであろう。海岸には、附近の土地の沈降によって、複雑な出入りに富んだリアス式海岸をなしているところが少ない。奥羽地方の三陸海岸、紀伊半島の海岸などはその例である。これに比べて瀬戸内海沿岸や九州の肥前半島附近などでは、大小の入江や岬、多数の島々によって変化極まりない海岸を作っており、いかに複雑な土地の変動が行われたかを物語っている。

このような海岸には、自然の良港がいたるところに見られる。近海に魚が多いわが国の海岸では、自然の入江の奥に漁港ができている場

合が少ない。そして、そこでは農村とは、ずいぶん違った生活が営まれている。しかしながら、わが国一流の港が、あまりこのような入江に発達していないのはなぜであろうか。



志摩半島のリアス式海岸

うになっている。

海上遠く離れて横たわる島々の中には、火山島もある。このような島々には、特殊な生活様式が残されていることが少なくなく、孤立した生活の一つの特色を表わしている。

平野が海に
終るところは、
砂浜となっ
ているのが普通
で、そこでは
砂丘のある單
調な海岸線を作
っている。
このような海
岸では、地び
き網による沿
岸漁業が盛ん
であったが、
漁場が遠い海
面に拡がった
今日では、大
きな漁港を根
拠地として、
活ばつな漁業
が営まれるよ

課題

1. わが国のおもな山脈、火山帯、有名な山々、おもな盆地、重要な平野、おもな半島・湾・島の分布状態。
2. 単調な海岸線と、複雑な海岸線の発達している代表的な地方。
3. 比較的なだらかな山地としてはどんな例があるか、などについて地図やその他の資料によって調べること。
4. わが国におとらない山国としては世界にどんな例があるか。
5. わが国の河川の水運状況はどうか、また郷土ではどうか。
6. 郷土の地勢と生活との関係をあらわした絵図を描くこと。
7. わが国の行政区画は地勢をどのように利用して定められているか。
8. 郷土附近の農村と漁村とでは人々の生活にどんな違いがあるか。
9. 孤立した生活様式のなごりとしては、例えばどこにどんなことがあるか、これについて調べてその話を学級ですること。

III 日本 の 気 候

一年じゅう暑い熱帯、きびしい寒さの期間が大部分を占める寒帯、雨が少なくて樹木も育たない乾燥地帯などに住む人々の生活の話を聞くにつけ、わが国土は気候の上からは恵まれているとの感を深くする。しかし同じ郷土の中でも、よく調べると、土地の位置や地勢によって気候にはいろいろな差があることに気がつくであろう。まして南北に長くつらなる島々からなり、しかも地勢が複雑であるわが国土では、地方によって、その気候はまちまちである。しかしながら、全体として見れば、温帯に位するわが国では、四季の區別もはっきりしていることは、われわれの心身によいしげきとなり、生活に活気を與える。またこのような気候は作物の種類を豊かにし、ことに夏の暑さと雨は、低地いたるところに水田の発達をうながし、山地には美しい森林を繁

茂させる。

ところが廣く世界をながめると、同じく温帯でも、地域によって氣候は必ずしも同一ではない。それではわが國の氣候には、世界の温帯諸地域に比べて、どんな特色が見出だされるであろうか。

暑さと寒さ 強い日光が照りつける夏の日中は、日かげにいても汗がにじみ出る。思わず「暑いなあ」と、いうこともまれではないであろう。夏はいつたいどこの温帯の土地でも、こんな暑さを示すものであろうか。

南北に長いわが國土の、北部と南部とでは、夏の氣温にも相当な差がある。どのくらいの差が見られるか、等温線圖や氣温表から調べてみよう。しかしわが國各地の夏の氣温を、世界の同緯度地方の平均と比べると、わが國の方が特に高いともいえない。そしてこの程度の氣温なら、空氣が乾いてさえいれば、ずっとしのぎやすいはずである。ところがわが國の夏は湿度が著しく高いので、われわれの身体には、あたかも熱帯のようなむし暑さを感じるわけである。

だから日本の民家の建てかたには、夏がしのぎよいようにと、通風その他にいろいろな苦心が拂われている。どういう点にその苦心が認められるか、郷土の民家について調べてみよう。そのほか、われわれの衣・食・住の様式には、夏の暑さに適應するように考慮されている点が少なくない。これについてはどんなことがあるかをよく調べよう。そしてわれわれの生活を改善するに際して、そのよい方面は、今後もできるだけ生かすようにくふうしよう。

このように、われわれは、暑い夏を過ごしやすいようにと苦心をしてきたが、夏が暑いことは、米作にとってたいせつな條件であることを忘れてはならない。もしもわが國の夏が涼しかったとしたら、今日のような豊かな米作は容易に望めないであろう。現に、北海道から奥羽地方へかけては、年によって夏の氣温が十分に上がらないことがあ

って、その時は非常な不作を招くのである。

風の吹く冬の日、「おお、寒い」とさけぶ声をしばしば耳にする。わが國の冬は、緯度の高い地方だけに限らず、たいていのところではなかなか寒い。そこで、一月の各地の氣温を世界の同緯度地方のものと比べると、海岸近くで5—6°、陸地内部で8°以上も低いのである。その上、冬の風によって、ますます寒く感ずるのである。それにもかかわらず、わが國の民家は一般に夏向きにできていて、冬の防寒についてはあまり考えられてはいないようである。郷土の民家では、どんな防寒の設備が見られるであろうか。その設備で、果して現代の生活に不便な点がないかどうかについて考えてみよう。

温帯に位する島々からなり、しかも近海を黒潮や対馬海流のような暖流が洗うわが國土は、氣候もごく温和であってよさそうなものである。ところが事實はこのように寒暑の差が大きいのは、なぜであろうか。これは近くに著しい大陸性氣候を示すアジア大陸をひかえ、ことにその北部は冬の寒さがきびしいので、その影響からのがれきれないからである。

ところで、同じ大陸に近い島國でありながら、ヨーロッパの西側に位するイギリスの氣候は、わが國に比べて、はるかに温和であるのはなぜであろうか。これについて調べてみよう。

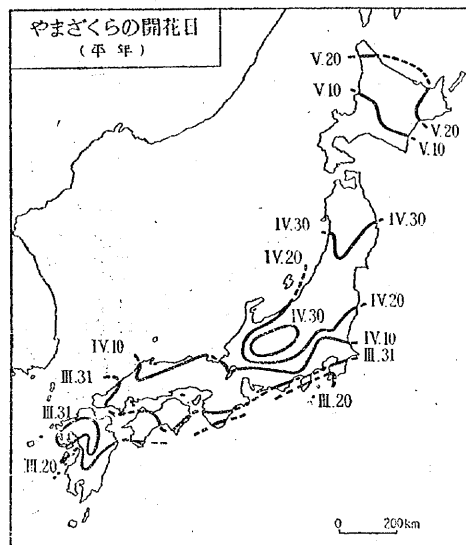
またわが國內でも、夏の暑さや冬の寒さの程度は、どこでも同一ではない筈である。わが國內で、夏も割合に涼しい地方や、冬も温暖な地方などを、氣温表によって調べて、地圖の上で區別してみよう。更に郷土の暑さ・寒さを他の地方と比べてみよう。

四季 わが國の夏と冬とは、氣候の上で極端な對照を示すが、その中間の春と秋とは、穏やかで心地よい。

このようにしてわが國では、四季の區別が極めて明らかとなり、これにしたがって自然の風物が著しく変化する。日本人はこの季節や風

物の変化に鋭敏な感覚を持っていることは、例えば日常のあいさつのことばの中にも、あるいは、詩歌・文章・絵画などの上にもよくあらわれている。たとえばどんな例があるであろうか。

ところで曆の上では、四季の期間はそれぞれきまっているが、実際の各季節のおとすれる時期や、それぞれの期間は、どこでも同一と見てよいであろうか。例えば、桜が満開となれば、春も半ばなことを思わせる。郷土の桜は例年いつごろ咲きはじめ、いつごろ満開となるか。



あるいは郷土では木々の紅葉はいつごろ最も見事となって、秋のたけなわなことを示すであろうか。

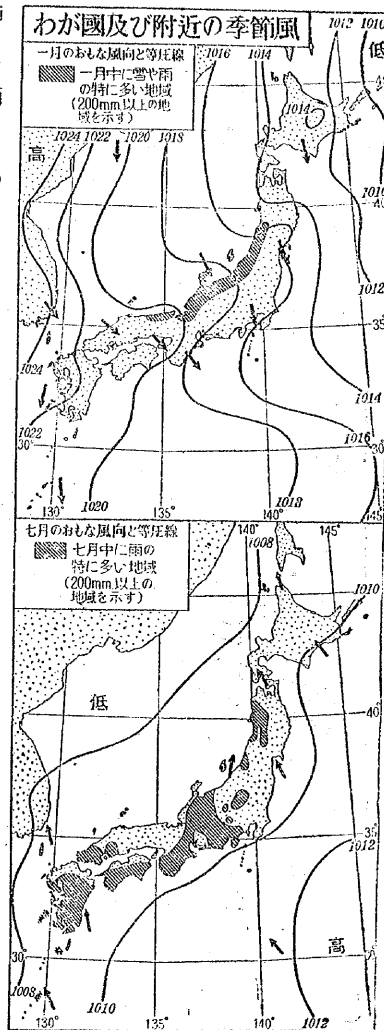
このようなことを、各地についていろいろ調べると、わが国内でも、地方によって、各季節のおとすれ方には差があることに気がつく。わが國の北部と南部、海岸と内部とでは、各季節の長短にどんな違いがあるか。これについてだいたいの傾向を考えてみよう。また熱帯や寒帯の季節の変化についても調べてみよう。

風と雨 冬の日に少し高いところへのぼると、寒い北西の風がいつも吹いていることに気がつく。これがアジア大陸内部の高気圧帯から、

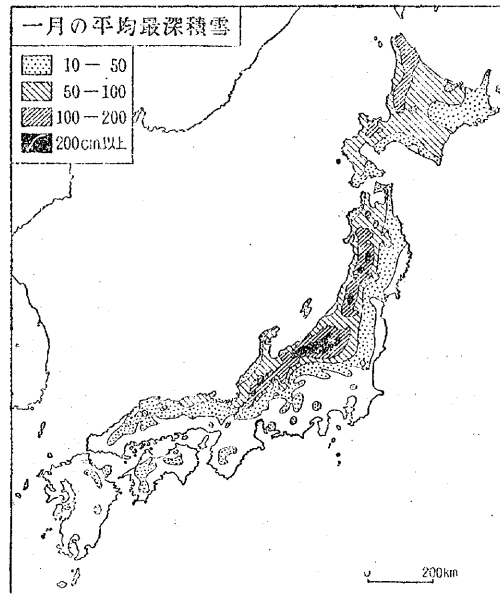
太平洋の低気圧帯へ向かって、吹きこんでくる冬の季節風である。大陸方面では気温が著しく下って寒く、また雨が降らない日が続く。

もしもわが國土と大陸との間に日本海がなかったとしたら、冬のわが國は、どこでも大陸方面と同じく乾燥することであろう。ところが実際は日本海があるので、冬の季節風は日本海を渡って来る途中で湿気を含み、これがわが國の日本海側の深い雪となる。北陸を中心とした地方の盆地や山ろくでは、家の屋根が雪で埋まることも珍しくなく、こんな雪の深い地帯は、世界にもその例を見ないほどである。これがためこの地方では、冬は野外の活動も困難となるし、積雪に対して家や交通機関を護るために、人々は助けてさまざまな苦心をしている。

これに対して、わが國の太平洋側の冬の雨量はどんな程



度であろうか。雨量表によって太平洋側の冬の雨量の状態を調べて、これを日本海側の場合と比べてみよう。そしてその違いの起る原因を考えてみよう。



夏の季節風は、冬の場合と反対になる。この風は冬のものに比べると弱い、太平洋から湿った空気をはこんでくるので、わが國の夏はむしろ暑くなる。またこの季節には、雨が多く、特に6月中旬から7月上旬にかけては、奥羽地方以南では梅雨の時期となる。

また夏から秋にかけての台風は、しばしば暴風雨を伴って、多量の雨を降らせる。

このように夏を中心として降る雨は、われわれの生活とどんな関係を持っているであろうか。例えば梅雨によってどんな利益や不利益が與えられるか。もし夏に雨が多くなかったとしたら、わが國の農業には、どんなさしつかえが起るか。また夏の雨によって、われわれは毎年利益ばかりを受けているか。これらの問題について考えて討議することとしよう。

日本海側及び太平洋側の冬の快晴日数表(雲量2以下)									
(太平洋側)					(日本海側)				
	12月	1月	2月	全年		12月	1月	2月	全年
高知	10	8	6	61	福岡	3	2	2	40
潮岬	9	10	7	65	札幌	1	0	0	23
名古屋	6	6	5	56	金沢	1	0	0	24
東京	11	11	8	58	新潟	0	0	0	22
水戸	12	13	9	63	山形	1	1	1	21
宮古	6	7	4	43	秋田	0	0	0	17
根室	6	5	4	37	青森	0	0	0	17

また夏を中心として雨が多いことは、廣くアジア季節風帯にあてはまることである。アジア季節風帯の住民は、一般にこれによってどんな利益を受けているか、またどんな場合に不利益をこうむるか。これについても調べてみよう。

ところでわが國は、雨量という点から見て世界的にはどんな地位を占めるであろうか。各國の平均雨量を計算してみると、わが國は世界の文明國の中では、最も多雨であるとの結論を得るのには、われながら驚く。それで、例えばわが國の家屋の構造などを調べてみると、多雨に対して深い苦心が拂われていることを発見

平均雨量表(mm)	
北海道	1060
本州	1700
四国	2030
九州	2050
中華民国	700
イギリス	1170
フランス	630
ドイツ	650
イタリア	500
カナダ	500
合衆國	750
アルゼンチン	650
オーストラリア	460

するのも、これから考えれば少しも不思議ではない。けれども一方では、わが國の氣候と異なった土地の生活様式が、そのまま取り入れられていることもあって、現在のわが國の生活様式は、なかなか複雑である。

課題

1. 氣候図によれば、わが國の夏(7月)、冬(1月)及び、年平均の

等温線の走りかたには、それぞれどんな特色が見られるか。

2. 郷土の四季は、それぞれおおよそいつごろから始まって、どれくらいの期間を占めるか。

3. 台風によって、どんな災害をこうむるか。

4. わが國の水力資源は、日本の地勢や氣候とどんな関係を持っているか。

5. 郷土の家屋や衣服、その他の生活様式は、郷土の氣候に対して、どのような点でよく適應していると思われるか。また、どんな点が現代の生活に合っていないと考えられるか。

IV わが國土の開発

村のはじまり われわれの祖先がこの國土に住みはじめたのは、いつ、いつごろからであろうか。また古代の人々の生活は、どのようなものであったであろうか。

はじめは海べに近い地方で、魚や貝をとり、野山に鳥やけものを追って生活していたようであるが、時のたつにつれて、次第に奥地へも移りすむようになった。ところが、西暦紀元前後のころ、大陸の方から金属器を作ることや、稻を栽培する方法が傳わたったために、まず西日本の人々の生活に大きな変化が起った。

このために人々の生活は向上し、村は大きくなり、この村を治めるかしらが現われた。そして勢力の強いかしらは多くの村々をまとめて、國をつくるようになったが、その國の中で、最も榮えていたのが北九州と大和であった。わけても大和の朝廷は、土地の豊かな大和を中心として、淀川の流域から瀬戸内海の沿岸に勢力をのばし、西暦 3—4 世紀のころには、早くも北九州をはじめ、山陰や中部地方をも統一するようになった。そうして大陸とのゆききも、だんだんしげくなり、

かの地のすぐれた農業技術もうつしうえられた。朝廷や豪族たちは、大いに水田の開発につとめ、池やみぞを掘って、かんがいの便をはかったので、西日本の耕地は急にふえていった。

土地制度のうつりかわり 大化の改新によって、今まで豪族の持っていた土地や人民は、みな國家のものとなった。そうして國民にはひとしく土地をかしあたえる班田制度が全國にわたって行われることとなった。今日、方々にそのあとが残っているのを見ても、どれだけ國土の開発が進んでいたかがわかるであろう。

こうして人口も増していったので、分け與える土地が足りなくなった。そこで土地を新しく開墾したものに、その土地を與えるようになったため、私有地である莊園がふえて、これなどが大きな原因となって班田制度がだんだんにくずれていった。

奈良時代には、遠い南西の諸島もわが國の中に含まれるようになり、奥羽地方の開拓もおおいに進んだ。この地方には、もと蝦夷が住んでいて、別の國のようなありさまであったが、奈良時代のはじめごろから次第に朝廷の勢力が及んで、平安時代の中ごろには開発が大いに進んだ。そうして牧場もひらかれて良馬の産地となった。

しかし、平安時代の末ごろには都の政治がゆるむにつれて、地方も乱れるようになったので、全國にひろまっていた莊園の中から、勢力のある地主（名主）が出て、武力でこれを治めた。これが武士のおこりである。これらの武士は鎌倉幕府の下にまとめられ、それぞれ莊園の地頭となって、その地方の開拓にあたった。今まで原野であった武蔵野や房総半島などに耕地のふえたのもこのころからである。

鎌倉時代の末ごろから、守護の勢力が強くなり、次第に大名領國をつくって、室町時代の半ばすぎから、いわゆる群雄割拠の世となった。そこで、諸大名は、めいめいの領内を豊かにしようとして、水利やかんがいのつとめ、農業の開発に力をつくしたので、このころから、わ

が國土は著しく開拓されるようになった。

農作物の種類もふえ、ところによっては稲のあとに、そばや麦をまくようになったし、同じ稲でも早稲とか晩稲などの品種が増し、茶や麻・桑などの手工業の原料になる作物も栽培された。

農業の進歩 近世のはじめになると、古い莊園制度を整理し、大名の領地をもととする新しい社会がつくられるようになった。この整理に大きな働きをしたのが檢地である。

この時代は都市が発達し、商業も大いにおこったが、何といってもその経済のもととなったのは農村であった。このために、幕府や諸藩は盛んに農業を奨め新田を開いたから、武蔵野や、北陸、奥羽などの台地や低濕地にも、たくさんの村ができるようになった。近くに何々新田とよばれる村があったら、いつごろできた村か調べてみよう。

このようにして農業はたいそう発達して来たが、それぞれの藩が、たがいに垣根をつくって、独立した國のようになっていた時代であったから、一たび天災やききんにおそわれても、よその藩からこれを救うこともなく、農民の苦しみは一とおりでなかった。

こうした小さなからにとじこもったような封建制度をうち破って、統一のある國家をつくらうというのが、明治維新の運動であった。それで維新後には、耕地や作物についてのいろいろの制限もなくなり、これまで、まちまちになっていた租税の制度も統一された。農作物もひろく市場に賣出されるようになったから、農業もいっそう進歩した。

また、外國貿易が開かれた結果、たいせつな輸出品である生糸を作るため、全国的に養蚕業が盛んになって、山の傾斜地や河原などが、桑畑として、どんどん開墾された。

北海道の開拓も、江戸時代の末ごろから注目されていたが、本格的に計画をたてて行われることになったのは明治以後のことである。

また明治維新後には、新しい欧米文化も、つぎつぎにはいつて来た。それにつれていろいろの改革が、國民生活の上に行われるようになった。これはそのころ文明開化といわれて、都會や一部の人々の間には思い切ったかわり方を覺せたが、それも農村までは容易にはいつてはいかず、依然として古い姿が残されて、封建的な習慣もなかなか一掃されるわけにはいかなかった。

鉱山の開発 人間が地中に埋もれている鉱石を掘り出し、これを道具に使うようになったのは、ごく古いことである。石器を作るために硬い石を見つけることも一種の鉱業であったといえよう。しかし、その石の中から金属をとり出し、これを利用するようになったのは、稲作のはじまりとだいたい同じころといわれる。

西暦3世紀ごろには倭人が半島にわたって鉄をとったことが傳えられている。わが中國地方の山間部でも、早くから砂鉄の採集が行われ、鉄の農具なども作られたりして、生活も非常に進んでいった。

國家が統一され、大和朝廷の勢力が盛んになると、鉄ばかりでなくひろく鉱産資源の開発が進められた。奈良時代に武蔵の國から自然銅が獻ぜられて、「和銅」という年号が定められたことをみても、これは当時の大きな出来事であったことが想像されよう。また、このころ越後で「もえる水」といわれた石油が発見されて、奈良へ送られたが、当時の人々のおどろきはどんなであったろう。あの大きな奈良の大佛ができ上がったことを見ても、すでにたくさんの銅や金銀の鉱石が掘り出され、その技術の進んでいたことがわかるであろう。

こうして中世になると、ますます採掘が進んだが、戦國のころには諸侯はその國を富み榮えさせるため、鉱山の開発に熱心になった。佐渡や甲斐の金山、石見・但馬の銀山もこのころから盛んになったのである。

やがて秀吉や家康は、これらの鉱山の多くを自分の領地とし、進ん

だ探掘の技術を海外からとり入れて、盛んに開発をはかった。それで近世のはじめからは、銅銭のほか大判・小判とよばれる金銀の貨幣も作られるようになった。



江戸時代の金の精錬

江戸幕府はとくに奉行をおいて、鉱山の監督に当たらせてた。またこのころ有名な足尾銅山が発見されたのをはじめ、江戸時代の中ごろには、おもな銅山が30箇所をこえるほどになり、銅は日本のたいせつな輸出品となった。

鉄も、中国地方はもとより、後期には陸奥の釜石をはじめ

北海道など各所に鉱山が開かれた。

石炭も元禄のころには、すでに北九州の遠賀川流域その他の産地では、農家で炊事などに燃料として用いていたが、幕末になると、諸所に採掘業が起った。

このように江戸時代を通じて鉱山開発はだんだんと進んでは来たが、まだまだその方法はごく幼稚なものであった。これが明治になると、政府は多くの資本を出して、その開発をはかった。やがてこれらは明治10年ごろから民間に拂いさげられて、次第に大資本の下に経営されることとなったが、産業の発達につれて、鉱産物の要求はますます多くなって、鉱業は急速に発展をとげていった。しかし近代工業は多種多量の鉱産資源を必要としたので、国内の産出だけでは不足するものが多く出て来た。

めぐまれた水産 わが國は四面海にかこまれ、寒暖両流に洗われており、また海岸線が屈曲に富んで、良港湾にめぐまれているので、古く

から水産業の発達したのは当然であろう。今日あちこちに残されている貝塚を見ても、石器時代の人たちがどんなに多くの食糧を海に仰いでいたかが知られる。

奈良時代には、地方からいろいろの魚類が貢物として都に送られ、淀川や琵琶湖の沿岸には、朝廷直轄の漁場が設けられたほどである。

やがて魚類を干したり、塩づけにする方法が発達するにつれ、魚類も商品として賣りさばかれ、中世の末ごろには各地に魚市ができた。

土佐・紀伊などの南海地方や伊勢海や日本海岸の越前・若狭などは、このころ有名な漁場となっていたが、西日本にも対馬や五島などの好漁場ができ、九州の漁民は、時には魚を追って朝鮮半島の方へもり出していった。

また、製塩の方法も進んだ。これまでは灘塩を焼き、かまで煮るといような幼稚な方法が、全國の浜べでよく行われていた。やがて瀬戸内海では室町時代になると、塩田を開いて大規模な製塩をするようになったが、備後の三原や伊予の弓削島の塩は最も知られていた。

江戸時代になると、製塩は更に発達して瀬戸内では赤穂・撫養をはじめ諸所で盛んとなり、関東の行徳（千葉縣）などもすでに製塩地としてあらわれていた。そして当時、藩によっては塩を専賣にしていたところもある。

そのころには漁業もまた著しく進み、漁獲物では常にいわしが最も多く、九十九里浜のような砂浜では地びき網も行われていた。漁獲物は食糧のほか肥料としても用いられるようになった。

北海道の漁場もおいおいに開けさけ・にしん・たらなどが盛んに江戸や大阪へ送られ、遠く中国にまで輸出された。

明治になって、漁業もまた近代化し、発動機を持った漁船が、遠洋に乗り出して行き、漁場も急にひろまったのである。



江戸時代の漁業

課題

1. わが國の先史人類の生活について調べて、その話を学級ですること。
2. 郷土附近に新山その他、新しい開墾に関連のある地名があれば、そこは、どのようなところで、いつごろ開かれたかを調べること。
3. 日本人の衣・食・住・物資の生産・交通通信・教育・政治・レクリエーションなどには、明治以後に外國からはいつて来た文化によって、どんな変化が起ったか、これについて学級で討議すること。
4. 現在、わが國の食糧増産について、どんな努力がなされているか。
5. 現在、わが國はどんな鉱産資源に恵まれているか。またどんなものに不足しているか。
6. 水産物は日本人の食糧としてどんな意味を持って来たか。これについて学級で討議すること。

後編

I 大陸に近い九州

九州の位置 九州は、わが國の南西の端に位するだけに大陸に近い。また狭い海峡をへだてて、朝鮮半島にあい対している。例えば、^{ながさき}長崎・^{シヤンハイ}上海間と、^{ながさき}長崎・東京間とでは、どちらが遠いか地図で調べてみよう。このような位置をしめる九州では、人々の生活にも、大陸と深く結びついて来た面の多いことが直ちに考えられるであろう。事実九州の文化の発達については、大陸との関係を見のがすわけにはいかない。

また、九州は、その位置によって、温暖な氣候に恵まれている。冬の寒さが案外きびしいことを特色とするわが國の中で、九州では1月の平均気温も、たいていの所では5°内外を示す。雪や霜も少なく、土地は年中耕せる。山地には、くすの木もあるし、みかんの類も全島に育つ。

このように温暖な九州でも、よく調べると地方によって、その氣候には差がある。そして温暖多雨な点では、南九州がことに著しく、平地では、ま冬に早くも菜の花が咲く。また、かぼちゃも早く市場へ賣出されて、人々に珍しがられるし、海岸には熱帯性植物が見られるところもある。更に南方に続く島々では、いよいよ温暖の度が高くなって、廣いさとうきびの畑もあらわれる。

北九州 アジア大陸に近い九州は、古くから大陸と深い交渉を持ち、いろいろな影響を受けることが多かった。文化はつぎつぎと傳えられたであろうし、また進んで大陸と往來するものもあったであろう。ことに北九州はわが國として最も早く開けた地方で、すでに彌生式文化

時代には、大和と共に、わが國文化の中心として栄えていた。

続いて奈良・平安時代も、太宰府や博多などが大陸との交通の要地となっていた。それからのち、この地方を舞台としてくり上げられたいろいろな歴史上の出来事を思い起しても、大陸との関係が深いことがわかるであろう。

この地方は近世のはじめには、また新しい西欧文化輸入の門戸となった。中でも長崎は鎖國の間も、わが國と世界とをつなぐ港となつて、近代日本の誕生に大きな役割をつとめた。

このような歴史を引きついだ北九州は、今日でも近代産業の第一線に立っている。ここに横たわる筑紫山地は、はじめは一続きの山脈で



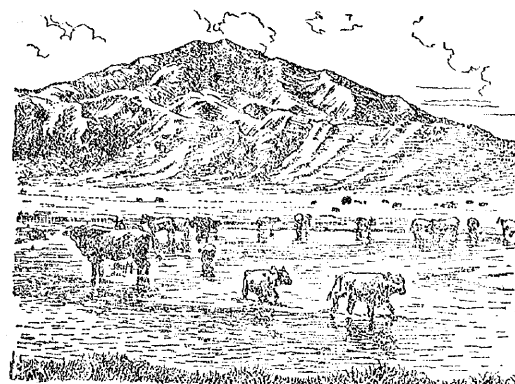
などの諸炭田があって、全国の5分の3の石炭を出し、わが國の重要な石炭供給地をしている。そして直方・飯家^{のうがに いいつか}その他のたくさんの炭坑町が発達しているが、一方、海岸に沿って^そは、門司・小倉・八幡・戸畑・若松などの工業都市がつらなって、北九州工業地帯をつくる。

ところがこの辺も、もとは、旧城下町の小倉をのぞいては、さびしい土地にすぎなかった。どうしてこんな大きな変化が起ったのであろう。

か。またそれはいつごろからのことであろうか。

そのほか北九州には大きな都市が幾つも発達していて、はなはだ活
 氣を呈している。おもな都市の分布や、その栄えている意味について
 調べてみよう。

筑後川沿岸の筑紫平野は重要な米の産地である。下流の低湿地には、



阿 蘇 山

中・南九州 中九州にも米の重要な産地熊本平野がある。一方、中九州には、阿蘇火山帯に属するたくさんの火山が噴出している。これらの火山は風景美に富み、そのすそ野は牧場として利用され、また温泉も方々にわき出ている。雄大なカルデラの中に数万の人口を養い、また中央火口丘が現在活動している阿蘇山や、海に映ずる雲仙岳は、国立公園となっている。ところで国立公園とは、いったいどういう意

味を持つところであろうか。また九州には阿蘇・雲仙以外にどんな国立公園があるか調べてみよう。温泉都市別府の名は雲仙温泉と共に世に聞えている。

九州山脈以南の南九州には近代的工業の姿はまだあまり見られない。そのかわりに、豊かな農牧風景が展開する。気温表から鹿兒島の1月の平均気温を調べても、あるいはこの土地の降雪のはじめや終りを調べても、いかに南九州が温暖であるかが理解できよう。それに雨量もたいいていのところでは年 2000mm 以上もある。

南九州には、火山灰におおわれた台地が広い面積をしめるので水田は少ないが、畑作が盛んである。鹿兒島県の農作物としては、さつまいもを思い出す人が多いように、これが広く栽培され、あわの産も多く、これらを常食としている地方もある。そのほかこの地域の畑作物としては、どんなものが有名であろうか。近ごろ、温暖な気候を利用して、野菜の促成栽培が宮崎県の海岸地方その他で行われている。霧島火山群のすそ野や、台地上の草原では、農家の副業として、馬や牛が飼われ、中九州と共に特色ある牧畜風景をあらわす。

九州の南西端にある坊津は枕崎・山川などと並んで、今日かつお漁業の有力な根拠地となっているが、古くは唐港とよばれ、大陸との交通が盛んであった。またのちには南蛮船も出入りしていたが、江戸時代のはじめ長崎が外国貿易の港と定められてから、ずっとさびれてしまった。

課題

1. 長崎は近代日本の発達にどんな役割をつとめたか。
2. 郷土のおもな都市について、その持つ意味が昔と現在とでは、どのように変っているかを調べて学級で討議すること。
3. 現在の日本の社会生活にとって国立公園はなぜ必要か。
4. わが國のさつまいもの栽培の歴史、現在の分布について調べること。

II 瀬戸内海をめぐる地方

瀬戸内の交通 日本の地図を開いて海岸線をたどると、大小さまざまな湾があるが、瀬戸内海のような内海は、他に見出だすことができない。かようにわが國でただ一つの内海であり、しかもその周囲に古い歴史を持つ地域をひかえた瀬戸内海は、地理的にまた歴史的に、特別な意味を持っている。

瀬戸内海の北にある中國地方は、中國山脈を境にして、北の山陰と南の山陽に分かれる。また内海を中に、山陽と北四國を含む地域はこ



れを瀬戸内とよぶ一區として取り扱うことができる。中國地方という名まえは、近畿と九州との中間にあるという意味で、わが國で最も早く文化の開

けた兩地方を結ぶ地帯として重要な役目を果たして來た。山陽の海岸地帯を通る中國街道は、都と太宰府とをれんらくする重要道路として古くから知られ、更に瀬戸内海の水路が、またこのために大いに利用された。

外洋から切り離された波穏やかな内海であり、いたるところに湾や島があって、港に適したこの海が最も便利な水路となったことは当然

である。したがって、瀬戸内の海岸には、古くから港町が発達した。ことに江戸時代に入り、沿岸航路がいよいよ開けて、物資の全国的な動きを見るようになると、奥羽西岸や北陸の米を、大阪や江戸に運ぶ船は、山陰を経て瀬戸内海を運ったので、内海の港々はそのにぎわいをしました。中でも内海の西の関門にあたる下関は、北國や九州の米をはじめ、その他の物資の中継港として栄えた。時がうつるにつれて、港の盛衰はあったが、今もやはり瀬戸内海は、わが國で最も船の交通のひんぱんなところである。この海の沿岸にあるおもしろな港には、どんなものがあるか調べてみよう。

近畿及びそれ以东と九州方面とのねんらくが、ますます重要となり、瀬戸内がわが國交通の要路として、その価値を増すと共に、この方面には各地に都市も発達した。ことに幹線鉄道である山陽本線の沿線には、姫路・岡山・広島・下関をはじめ、多くの都市が生まれている。これらの都市には近年、工業がおこっている。

瀬戸内の土地利用 古くから交通の開けた瀬戸内地方は、人口がはなはだ密であるが、広い平野がなく、海岸に小平野が散在するにすぎない。農家人口に比べて耕地が少ないので、土地の利用は行きとどき、傾斜地にもいたるところ段々畑が開かれている。ことに瀬戸内海の島々には、小高い山の頂上まで、ひなだんのようにきれいに畑の並んだ風景が見られる。また瀬戸内沿岸の一部には、干拓も行われている。

氣候が温暖で、晴天の多い瀬戸内には良い質の米を産し、播磨・岡山・讃岐の諸平野はその主産地で、麦作も一般に盛んである。これら諸平野では、ひでりに備えるため、昔から各所にため池が掘られ、大阪平野と共に、わが國でも特にため池の多い地方である。

耕地の少ないのを補うために、農家の副業が発達しているのもこの地方の一つの特色である。岡山・讃岐の兩平野を中心に、麦稗眞田や

經木眞田が作られ、岡山・広島の間際では、たたみ表や花むしろの特産物を多く産する。氣候條件と土地利用とが結びついて、瀬戸内の諸地方には果樹の栽培が発達し、いろいろの果物を出す。また中國山地に、廣く行われる牛の牧畜も、地形の關係にもよるが、やはり農家の副業として行われている。



瀬戸内の産業中、最も特色のあるものは製塩業であろう。この地方の氣候が製塩にいい条件であるばかりでなく、花崗岩の分解した白砂の海岸は遠浅で、塩田を作るのに適し、潮の干満

も海水のくみ上げにつこうがよい。沿岸をふらどる瀬戸内の塩田は、海岸風景に一つの色どりをそえている。塩は米と共に日常生活の必需品であるから、交通不便な昔は、全国各地の海岸で製塩が行われて、それぞれ地方の需要に応じていた。しかしその量はごく少なく、瀬戸内の塩船は最も廣い地域にわたって活動し、この地の塩は常に國內の市場に重きをなした。明治以後、交通が発達するにつれ、各地の塩田は次第に整理されて、製塩条件や輸送の便に恵まれた瀬戸内にそれが集中された。最近各地方で小規模ながら再び製塩が行われている

のは、なぜだろうか。

瀬戸内海の一部は国立公園に指定されていて、他の国立公園とは著しく違った趣を持っている。しかしこの内海全体が海の公園であって、そこでは美しい変化に富んだ自然がそのままに風景として展開するの



瀬戸内の塩田

ある。塩田・段々畑・船等はその例である。こうした瀬戸内海の風景を組み立てているいろいろの要素を調べ、その特色を他の国立公園と比較してみよう。

山陰と中國山地 瀬戸内海地方に比べると、山陰は平野が圧倒的に少なく、また海岸線もずっと単調である。気候の上からも両地方は、はっきりと区別され、裏日本式気候の特色を持つ山陰は、冬季雨雪が多く、生活様式にも北陸に似たところがある。しかしここでは、北陸のように積雪が産業・交通に大きな影響を及ぼすほどではない。海岸地帯の小平野がおもな農耕地で、他の日本海沿岸の地方と同じく専ら米作に力を注ぎ、麦の裏作など、ごく一部にすぎない。しかし養蚕は山陽方面よりもむしろ盛んで、鳥取・倉吉・米子等はいずれも製糸業地である。

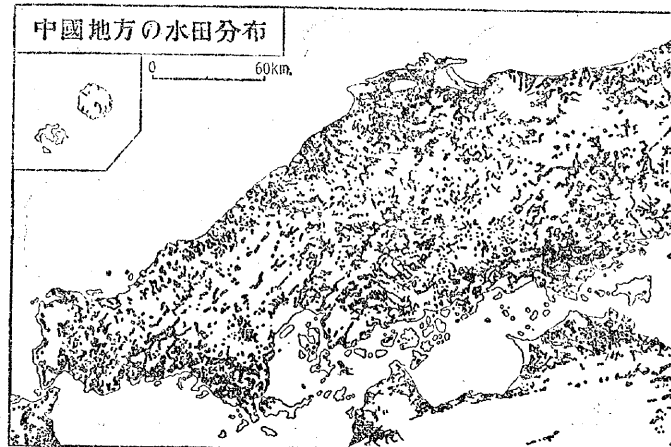
夜見浜の先端の境とれんらく船を通ずる隠岐島は日本海方面の漁業

ではなく、その中にいろいろの人間生活が織りこまれて、調和のある一つの生活舞台としての姿を表わしているところに

大きな特色が

の根拠地として知られている。静かな宍道湖の風景を前にひかえた松江は、山陰地方における文化の中心地にふさわしい所である。山陰は白山火山帯に当たっているため、温泉が多く、また大山のような火山があつて、すそ野は牛の牧場に利用されている。わが国には珍しい高

中國地方の水田分布



原状を呈する中國の山地は、火山のすそ野と共に牧場に適し、山陰・山陽のいたるところで、農家の副業として子牛が育てられる。それらは肉用あるいは運搬用として各地に送り出されるが、山間盆地の町では、にぎやかな牛市の立つところも少なくない。

南四國 北四國と背中合わせの南四國は、北に高い山々が連なり、南は黒潮の流れる海に面し、冬暖かく、夏特に雨が多い。山には林産が豊かで、すぎ・ひのきの良材を出し、海にはかつお・まぐろが多くとれ、かつお節の製造が盛んである。平地の少ないこの地方では、高知平野と吉野川の谷は農耕地として重要である。高知平野の一部では、米の二期作や野菜の促成栽培が行われ、吉野川の谷では、上流はたばこ耕作、下流に養蚕が盛んである。高知附近を主産地とする和紙

は、昔から名高い。けわしい四國山脈を横ぎる鉄道が近年開通したが、まだ陸上交通は一般に不便で、沿岸航路がこれを補っている。

課題

1. 瀬戸内海の島々や海峡の分布状態、風景の特色、史跡地その他について調べ瀬戸内海を船で通る話にまとめて、学級で発表すること。
2. スイスの牧畜生活について調べ中国地方山地のそれと比べること。
3. わが国のかつお、まぐろ漁業の重要性について調べる。

III 文化の古い近畿

奈良盆地 奈良盆地を中心に、周囲の京都・近江・大阪・伊勢等の盆地・平野を含む近畿中央低地は、わが国の文化発展の歴史と特に深い関係を持つ地方である。わが上代の歴史は、まず奈良盆地を中心としてくり振げられる。穏やかに起伏する山々が、周囲をくっきりとかぎり、その中に平らな土地をいだけ模型のような盆地、それが奈良盆地であって、上代の文化をはぐくむのに、まことにふさわしい土地がらであったことを思わせる。盆地の北部に大陸の形式を取り入れた大規模の平城京が作られるまでは、皇居はおおむね盆地南部の諸所に置かれていた。この平城京のすがたは、かがやかしいこの時代の文化をよく写し出している。当時都のあった場所は、のちにはさびれてしまい、東の部分のみが次第に岡のふもとの方へ移って、今の奈良の市街をつくったのである。

この時代に至るまでに、すでに大陸の文化はある方面にとり入れられて、生活を豊かにした。土地制度の改革や農耕技術の進歩もその一つである。こぼんの目のような形をした規則正しい地割をもって、倣然と配置された條里の制は、全国にわたって行われたが、奈良盆地に

は最もよくその跡をとどめている。大阪平野や近江盆地などにもそれがよく見られる。

かくて奈良盆地では、早くから土地がよく耕され、かんがいの設備にも力が注がれた。村落も各地におこり、市も諸所に立った。同じよ



奈良盆地

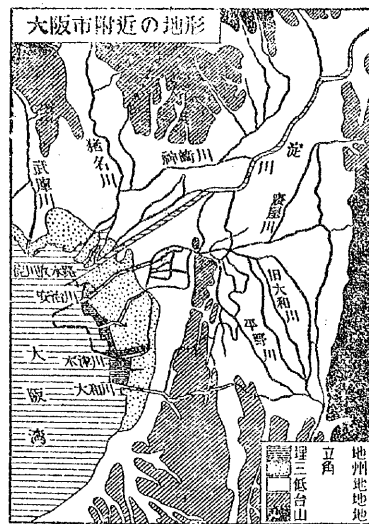
うに、大阪平野その他近畿の諸低地は、古く耕田が開け、人々の多く集まり住んだところである。

京都盆地

京都盆地も奈良盆地のように、地勢がよくまとまり、山川の趣が優美である。この地に作られた平安京は、これまた雄大な計画にもとづくもので、千余年にわたる久しい間の都として、常にわが国の歴史の動きとかかわりを持った。平安京の西半部は荒廃して、東半部が山寄りの方へのびて、今の京都の町並みができたことも、奈良と似通っている。この地は奈良よりもいっそう交通に便利な位置にあった。首府として全国交通の要地となり、東海・山陽・北陸・山陰等を通ずる諸街道は、いずれもこの地とれんらくした。今日、鉄道の交通においても、この関係はそのまま認められる。規則正しい京都の町すじは平安京当時の形を保存するもので、何條・何小路などの町名も、昔のなごりである。また生活様式、ことばづかい、年中行事などにも古い傳統がうかがわれる。なお、すぐれた美術工藝品も、古都にふさわしいものである。宇治を中心とする附近の丘陵地は、優良な玉露茶の産

地として名高く、盆地の周辺には竹林が多く、たけのこを産する。京都・奈良及びその附近には、いたるところに史跡・名勝があり、訪れる人が多い。

大阪と神戸 都の所在地であった奈良・京都の両盆地が、歴史的に大阪と深い関係のあったことは、見のがすことができない。大阪は昔



できた古い港で、都と瀬戸内海方面とを往々する要地であった。すなわち上代において、大陸文化輸入の門戸となり、わが國の大陸への使節も、外國の使節も、主としてこの港を経由した。その後この港町はいろいろの盛衰を経たが、江戸時代にはいつ、いよいよ目ざましい活動期を迎えることになった。つぎつぎに切り開かれた多くのほり川は、淀川とあいまって、水運の便を與えた。遠近の諸大名が米その他、國もとの産物をこの地の商人によって賣りさばいたことは、大阪の商業的發展に大きな力となった。いろいろの商品が取引されたが、中でも米取引は最も盛大であった。大阪は陸上交通にも便利な位置にあったが、それにもまして水運の便を最もよく利用してきたことに、この地の繁榮の基礎がおかれたといえる。京都との間には淀の川船が盛んに上下し、また海上の運送は、当時、最大の消費地であった江戸との間に最もひんばんで、多くの荷物船が定期的に往來した。江戸時代を通じて、いわ

ゆる「天下の台所」として栄えた大阪は、まさしく町人の都であった。そして江戸の文化と比べられる上方の文化が生まれた。

進取的で経済活動に長じた大阪人は、明治以後、紡績その他工業方面にも力をふるい、この地を大工業都市に育てあげた。かくして大阪は阪神工業地帯の中核となり、また築港の完成によって、大貿易港としてもあらわれ、東京と共に近代日本の商工業の代表地となった。

神戸も大阪と同じく古い歴史を持つ港であるが、横浜と並ぶ大貿易港として発達したのは、大阪という大商工都市をひかえて、その外港の役目をつとめたことによるところが大きい。船着きに適した地形を利用して築港された神戸港は、どんな大汽船の出入りも自由である。

大阪湾をひかえて、古來、交通の要地に当たる大阪平野は、氣候・地味にも恵まれて、早くから農業が開け、かんがいの設備も発達して、米その他の農産が豊かである。大工業地帯が出現して、周囲の農村に市場向きの園藝農業が広がって行った。周辺の山ろく地帯は、甲府盆地と並んで、ぶどう栽培の中心地となっている。大阪を中心に多くの都市が分布していて、この平野は、東京附近と共に、わが國で最も人口の密度が高い。

近江盆地と伊勢平野 近江盆地は、京都に近く、古來、交通の要路に当たり、琵琶湖の水運とあいまって、水陸の交通が便利であった。街道が周囲の山地を越えるところには、関所が設けられていた。街道はどんなところを通ったか、またどんな関所があったかを調べよう。

清らかな湖水をへだてて、比良から比叡につづく山々を望む湖東の平野は、低平な三角州のつらなところ、盆地のおもな農耕地であり、良質の米を産し、また、なたねの産も多い。はじめ行商によって、この地の物産を全國に賣りひろめた近江商人は、やがて江戸・大阪・京都等の都市に多数進出し、すぐれた商業的手腕によって成功した。その傳統的活動力は今なお実業界に重きをなしている。

伊勢平野は、三角州のつらなる海岸の低地と、そのうしろにある山ろくの丘陵地とから成り、米・麦・なたね等を多く産し、丘陵地では茶の栽培も盛んである。この平野は、大阪平野と同じように、近畿における海への一つの出口に当たるので、古くから港も発達して、海上のゆききに便利であったし、陸路には参宮街道や東海道が通じて、宿場町がはじょうした。今日では、おもな都市では綿工業が盛んである。近江商人と並び称せられる伊勢商人が、商業に便利なこの地方におこったのも偶然ではない。

北部と南部の山地 中央低地の北は、中岡山脈につづく、丹波高原を中心とした山地である。養蚕の盛んなところで、諸所に散在する小盆地の町では製糸が行われる。山のせまった海岸には深く入りこんだ湾があつて、その奥に港が発達している。

南部の紀伊半島も、ほとんど大部分が山地で、その中央には高い山々がつらなり、川は深い峡谷をきざんでいる。南九州・南四國と同じく、温暖で雨の多いところであるから、森林はよく茂り、川口附近の町は、切り出される木材の集散地であるとともに、製材の中心地となっている。またこの山地には吉野山をはじめ、有名な史跡名勝の地が少なくない。どんな所があるか調べてみよう。

黒潮の流れに臨む沿岸一帯は、昔から漁業が盛んで、各地の小湾に漁港が見られる。紀ノ川や有田川沿岸の斜面には、いたるところにみかん山が開かれ、気候条件と栽培技術とがあいまって、昔からみかんの名所としてうたわれている。

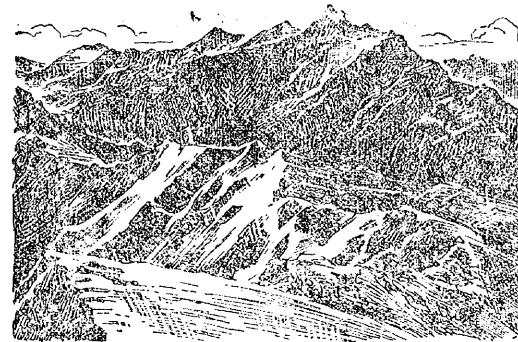
課題

1. 近畿の史跡、名勝地めぐりの計画をたて、学級で協力していろいろな予備調査をして発表すること。
2. 近畿の人口分布(密度)図を、種々な表わしかたで描いてみること。
3. 阪神工業地帯の発達という題で作文を書くこと。

4. 南九州、南四國、紀伊半島の自然や産業は、どんな点で類似し、どんな点で違っているか、これについて討議すること。

IV 本州中央の高地と海岸地帯

中央高地 中央高地は本州の屋根といわれるだけに、高い山々がそびえている。



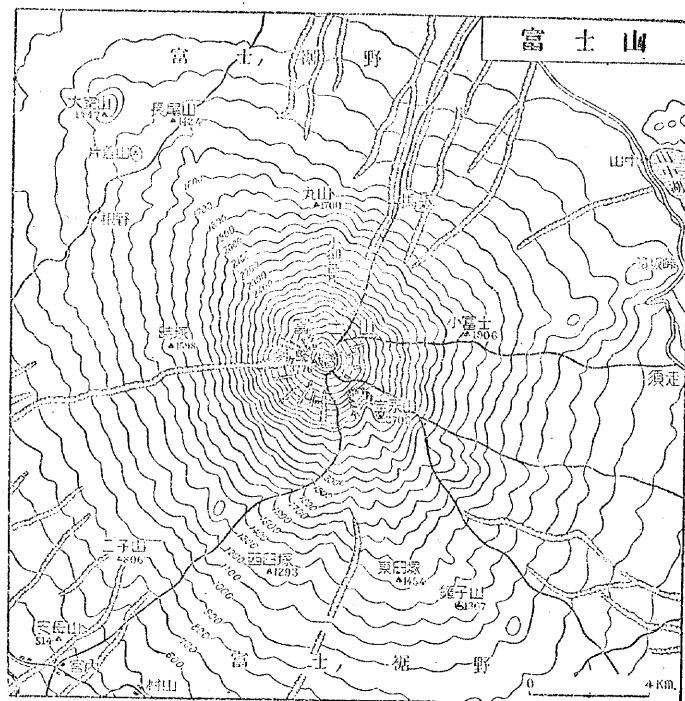
日本アルプス

ことに飛騨山脈の山々のけわしい姿は、ヨーロッパのアルプスをしのばせるところから、日本アルプスとよばれ、のちに

は木曾・赤石までもその範囲内に含むようになった。この地方には火山が方々に噴出して、ますます地勢を複雑にしているし、東部には関東山地や三國山脈があつて、関東地方との境をなしている。

ここの山地で、人の住まない土地が廣い面積をしめているし、またこんな山地があるために、本州の交通がすいぶん妨げられる。だからここの山地は、われわれにはじゃま物のような気がするが、事實は必ずしもそうではない。ここはわが國第一の水力利用地であつて、わが國の水力電氣の60%以上はここから供給される。また林産も豊かである上に、その風景もわれわれに無形の大きな利益を與える。

富士山の美しい姿は、日本人の心をどんなにか清めていてくれるこ



とであろう。これに対して、日本アルプスの男性的な山々は、われわれに剛健な氣風を養わせてくれる。それに中央高地には、スキー・スケートの好適地や避暑地も多い。有名な山々・峡谷、スキーやスケート場、避暑地にはどんな例があるかを調べてみよう。

この地域の地図を見ると、山に囲まれながらも方々に町が発達している。そこは盆地か、やや幅広い谷底平野であって、これらがこの地域の人々のおもな生活舞台である。地図からはどんな例が読みとれるであろうか。

これらの土地では、冬の寒さがきびしく春のおとずれるのも遅い。

低地もせまいので、山ろくの傾斜地までも階段状の水田を発達させているところもある。また土地のやせている山間部では、そばなどを作っている。また、ここの人々は特色のある産業に力を注ぎ、善光寺平ではりんご、甲府盆地ではぶどうが栽培されているし、そのほかいろいろな特殊生産物がある。しかしこの地域の人々の生活を豊かにさせて来たものは養蚕及び製糸業である。

長野県はわが国第一の養蚕地で、農家では春・夏・秋の三季を通じて養蚕に専念してきた。盆地内の乾燥した気候は蚕の生育にも、まゆを貯えるにもよく、まゆの産額では全国第一の地位を占めてきた。これにともなって製糸業も各地で盛んで、諏訪盆地の岡谷は、わが国第一の製糸都市である。その他の盆地や谷底平野のおもな都市でも、まゆの集散や製糸が行われている。養蚕、製糸地帯は更にのびて、南の東海地方や東の関東地方の山ろく地帯にまで及んでいる。

しかしもともと養蚕や製糸は、おもに外国への輸出をめざして行われて来たものである。してみると、今後この産業の盛衰に最も大きな影響を及ぼすものとしては、どんなことが考えられるであろうか。

東海地方 この地方は明るい農村風景にみち、耕地は年中よく耕されている。伊豆半島から駿河湾沿岸にかけては、いたるところにみかん山があり、この地方は紀州とともにみかんの主産地である。また駿河湾沿岸の台地・丘陵地には、茶の栽培がはなはだ盛んで、茶畑のつづく風景が見られる。このあたりでは昔から茶がつくられていたが、明治のはじめごろから、耕地に適しない台地を開いて茶の栽培に利用することになり、たちまち台地一面がきれいな茶畑と化した。それと共に製茶業も静岡を中心として著しく発達し、その製品は外国へも盛んに送られた。駿河湾沿岸の風景を色どるみかん山と茶畑とは、いずれも気候の温暖なことを示すものであり、事実この地方は、南四國から東に続く温暖地帯の延長に当たっている。

もともと、この地方は、古い文化地帯の近畿地方を東日本と結びつける役目を果たして来た。したがって文化も早くから開け、ことに街道交通のはなやかな時代には、東海道は人々の往來でにぎわい、沿道には多くの町が発達していた。その中でも名古屋は、大きな城下町として榮え、明治以後は東京・大阪に対立する商工業都市に発展した。それとともに、この附近や、その他の東海道本線に沿った、主要都市にも工業が起り、東海地方は新しい姿と変わった。そして名古屋を中心とする工業地帯の延長は、三重縣の伊勢海沿岸にも及んでいる。

名古屋北郊で行われている市場向きの野菜栽培は全国的に有名であり、南東の安城附近では、養蠶などを加えて、進んだ様式の農業が行われている。また焼津は、わが國有数の遠洋漁業の根拠地として知られている。

北陸地方 冬季この地方をおとすれと、雪の深いのには驚くであらう。海岸でも1m内外、山ろくでは2-3mも積もっている。だからこの地方の



北陸の「がんぎ」

家では丈夫な柱を用い、窓も高いところにあけてある。うっかりしていると、雪の重みで家がつぶされることもあるの

で、時々屋根の雪おろしもしなければならない。これには、なんとかくふうの余地がないものであろうか。またこの季節には、交通機関もいろいろな事故が起きることは、新聞にもしばしば報道される通りで

ある。そこで長岡・高田その他の町では、家々の軒先につくった「がんぎ」とよばれる廊下街ができています。

こんなに雪が深くては、戸外の仕事ができない。それで冬の間だけ他地方へ出かせぎに行くものもあるし、さもなければ暗い家にとじこもって、いろいろな副業に従事する。越後平野の山ろく地方の町や、富山平野の諸都市で行われる織物業、福井縣・石川縣の羽二重機業、その他の土地の特殊工業なども、その発達のもとを調べると、冬の農家の副業と深い関係を持っている。また有名な富山の薬賣りも、出かせぎの一つの形である。

この地方の夏の景色は、冬とは著しく違う。低湿な越後平野、扇状地からなる富山平野をはじめ、各地の平野では、かんがいがよく行われて、見渡す限り水田である。そして一つぶでも米が多くとれるようにと努力しているありさまが、あらゆる点で認められる。なぜこんなに米の生産に、昔から、はげんで来たであらうか。冬の生活と関連させて考えてみよう。

この地方にも、今日では、豊富な電力を利用して新しい工業が起って来た。そして諸都市も近代的な姿にだんだん改まっている。おもな都市や、そこで行われている工業について調べてみよう。

課 題

1. 中央高地のおもな盆地や谷底平野の分布、それぞれの中心都市を地図で調べること。
2. 東海道の交通の昔と今とを比べて、その話を学級ですること。
3. 夏休みに富山と日本アルプスへのぼる計画をたて、学級で発表すること。
4. 外國では養蠶や茶の栽培はどこで盛んに行われているか。またわが國の生糸や茶の生産の將來性について調べて学級で討議すること。

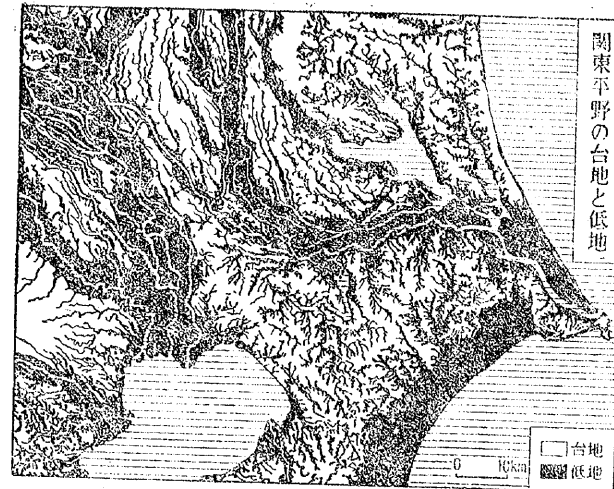
V 広い平野を持つ関東地方

関東平野 関東地方の地図を見よう。北と西とに山地をめぐらし、南には房総三浦の丘陵地があつて、その間に廣々とした関東平野が太平洋に面して開けている。他の地方からこの平野に入るには、峠を越さなければならない。昔は足柄・箱根・碓氷などの峠が重要な門戸であつたが、その東に当たる関東地方は坂東とよばれた。これに対して関東とは、もと鈴鹿・不破・逢坂（あるいは愛宕）の三つの関所から東の土地をさした。それがのちに、坂東と同じ意味に用いられるようになったのである。

関東平野は、今日わが國の政治や文化の中心地として、最も重要な地位をしめている。しかしここがわが國の歴史の上に大きく浮かび上がったのは、今から700年前、鎌倉に幕府が開かれてからのことである。もと江戸時代にはいつてから著しく発展し、古い傳統を持つ近畿と共に、わが國の文化・経済の中心となったのである。

地図で見ると、関東平野は、一面に低い平な土地のように表わされている場合が多い。しかし実はこの平野には、武蔵野台地・下総台地その他の台地が廣い面積をしめている。そして低地は利根川本支流、その他の川の沿岸や海岸に発達しているにすぎない。なぜこのようなありさまが、多くの地図では示されないのであらうか。

関東平野には、今日多くの都市や村落が発達して、わが國で最も人口密度の大きい地域を作っている。土地の開拓は著しく進んで、農産が豊かである。ことに低地が早くから水田化されたことは、米作に主力を注いで来たわが國としては当然であつたが、利根川中流以下の地



帯には低湿地が多く、その開拓は容易ではなかつた。今日利根川下流地方のいわゆる水郷の特色ある農村風景を見るにつけても、いかに開拓に苦心を拂ったかがうかがわれる。

関東平野の台地の表面は、ゆるやかに起伏し、廣く如地として利用されている。そして大麦・小麦の産はわが國第一で、その他さつまいもの産も多く、葉たばこの特産地もある。また、東京近郊の武蔵野台地は住宅地として大いに発展し、いかにも健康地らしい感を与える。ところが、このような台地の開拓は意外にも低地に比べて、はるかに遅れ、長い間、雑木林や草地として残されていた。しかし水が得やすい部分には古い村があるところから見ると、一般にはどうして開拓されなかつたかが、容易に判断されよう。しかし、江戸時代の中ごろから新田村が急にふえるようになった。また栃木縣の那須野の荒れ地は、明治以後の開墾によって、ようやく村ができるようになった。

関東平野は、冬は晴天が多いが、北または北西の寒くて乾いた風が

吹く。ことに廣々とした台地は風が強いので、農家は一ぱんに西側と北側に防風林をめぐらしており、單調な平野の風景に趣をそえている。

東京と京浜工業地帯 徳川家康が居を定めた当時の江戸は、武蔵野台地の末端近くに位するさびしい村にすぎなかった。そののち大きな城下町として榮えて行き、人口も享保 7 年（1722）の記録によれば、



水郷の風景

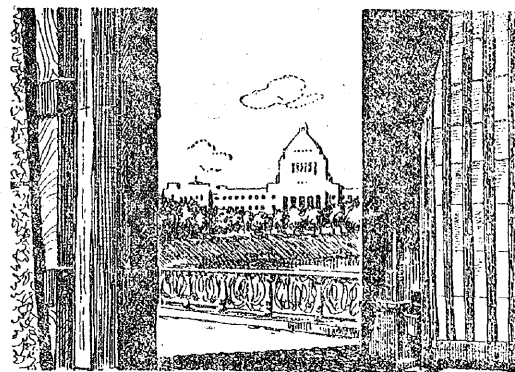
70万以上と推定されるほどの大都市となり、明治以後、わが國の首都と定められてからは、ますます大きくなっ

た。このように急速に人口が増加する都市では、ややもすると市街は亂雑な發達状態となって、都市生活の上にいろいろな不便や不利をまねく。江戸時代には、しばしば大火があり、そのあとにはいつも市区の改正が行われたが、大正 12 年の大震災後、市街の大整理を行った。それでもまだ十分ではなかったので、最近新しい都市計画のもとに復興が開始されている。

東京の門戸、横浜が安政 6 年（1859）に開港された当時は、ごく小さい村であつた。それがそののち急速に發展したばかりでなく、京浜間の低地には工場が立ち並んで、東京・川崎・横浜をつらねた京浜工業地帯が出現した。なぜここにこんな大きな変化が起つたのであろうか。この地帯では、戦災後の復興も次第に行われているが、工場の規

模・設備・衛生状態その他の点で、以前の状態には欠陥がなかったであらうか。これらの問題を、わが國の他の工業地帯についてもいっしょに考えてみよう。

ところで大都市附近の農村では、都市生活者に供給することをめざした特色ある生産、例えば野菜や花の栽培、養雞・養豚などが行われる場合が普通である。郷土附近にはこのような例は見られないか。また



議事堂

京浜工業地帯の近くでは、どんな例があるかを調べてみよう。

関東平野をとりまく山地と海岸 京浜工業地帯以外でも関東平野の諸

都市ではいろいろな工業が行われている。利根川下流地方から江戸川沿岸にかけては、ところどころに昔から名高い醸造地がある。また西部から北西部の山ろく地帯へ行くと、ここに大きな工場が現われて来る。それは製糸工場である。

この辺では、かんがいの便の少ない土地には桑畑が多く、中央高地の養蚕地帯の延長に当たる。これに関連して附近の都市である熊谷・富岡・高崎・前橋などには製糸業が行われて来た。なおこの地帯の八王子・伊勢崎・足利・桐生などは、古くからそれぞれ特色のある組織物の産地である。

この地帯背後の山地は、関東平野と他の地方との交通を妨げている

が、江戸時代には敵を防ぐ要害の地として利用された。今日ではここを越す鉄道の敷設には、いろいろな苦心が拂われている。どんな例があるか。

しかし、これらの山地も一方では、人々の生活に大きな利益を與えていることを忘れてはならない。例えば北部山地には足尾・日立の鉾山や常磐炭田^{じょうばん}があって、わが國の工業的發展の上に重要な役割を演じている。そのほかには、この山地はこの地方の人々にどんな恩恵を與えているか、これについて各自で調べ、更に中央高地の場合と比べて同じ点や、違っている点を区別してみよう。

関東平野の人々は、海からも大きな恩恵をうけている。近海は魚類が豊富であり、海上に活躍する人もなかなか多い。九十九里浜や鹿島灘沿岸のような砂浜には、農村の間に漁村が点々としているが、岩浜には、漁港が多い。そして銚子や三崎は漁業の中心地である。東京湾沿岸ののり（海苔）の養殖も昔から名高い。近くを黒潮が流る南部の海岸では、その温暖な氣候がいろいろに利用されている。

課 題

1. 「新しい日本の政治とその中心地東京」という題で作文を書くこと。
2. 都市計画はなぜ必要なのであろうか。これについて調べて学級で討議すること。
3. なぜ江戸時代の中ごろから新田村がたくさん生れるようになったか、歴史の本によって調べること。
4. 利根川の治水の歴史や最近のはんらんの原因、当時の被害状況について調べること。
5. 関東地方の南につらなる島々の自然や生活について調べること。

VI 冷涼な東北日本

奥羽地方（東北地方）や北海道は緯度が高いだけに、他の地方よりも氣温が低いことは当然である。ことに冬は寒さもきびしく、その期間が長い。西南日本と、東北日本とでは、冬の氣温や、霜や雪の期間にどんな違いが見られるであろうか。これについて、例えば鹿児島と青森や札幌の場合を比べてみよう。また東北日本の1月の等温線の走り方から、どんな特長が読みとれるかについて調べてみよう。

寒い地方では、暖かい地方に比べて、農業やそのほか人々の日常生活の上に、不利な点が少なくないことは容易に想像できよう。しかし東北日本では、冬の寒さもシベリアや北部滿州のようにひどくはないし、夏を中心とする期間には、氣温も相当高くなることは幸いである。そして東北日本は、わが國の中でも農業地として重要な地位を占めている。これについてはこの地方の人々が、よくその自然の不利な点を補いながら土地を開拓して來たからにほかならない。しかし同じ冷涼な地方でも、東北地方と北海道とでは、自然条件にもいろいろな違いがあるし、開拓の歴史も違っている。これに應じて、産業の発達状態にも両者の間ではさまざまな違いが見られる。

(1) 奥羽地方の産業

奥羽中央山地と日本海側 奥羽地方の地図を見て、まず氣がつくことは、その中央地帯に沿って、たくさんの火山が噴出していることであろう。この山地によって奥羽地方は日本海側と太平洋側とははっきり分かれる。

この山地は東西の連絡に非常な妨げとなっている。けれども、この山地には十和田湖をはじめ、風景美に富んだところも多いし、温泉も

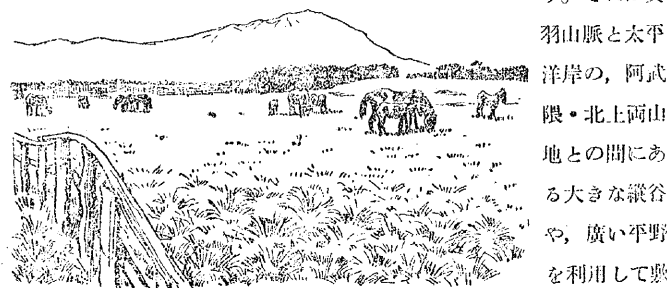
あって、人々の保健・慰安に役立つことも少なくない。そののみならず、この山地は、銅・金・銀などの鉱産に富んでいる。

この山地は氣候の上でも、明らかな境を作っていることも理解できるよう。日本海側の冬は、北陸地方と同様に深い雪にとざされる。

地図でわかるように、ここでは、北陸と違って地勢が複雑である。奥羽山脈の西側に当たっては大館・横手・新庄・山形・米沢・会津などの盆地が縦に並んでいる。これらの盆地の水を集めた川は、それぞれ山羽丘陵や越後山脈を横切る横谷をとって日本海に注ぎ、下流に平野を作っている。冬の風は海岸地帯の外、さらに盆地内には一そう深い雪をもたらす。そこで冬の間、家にこもって副業に従事していた人々は、4月の雪どけを待って、つめたい水の中に苗代の準備にかかり、5月には早くも田植えを終える。水田の裏作ができず、しかも気温の高い期間が短いこの地方では、人々はこのような苦心を拂って、米作に力を注いでいるのである。

奥羽の太平洋側 日本海側に反してこの地方では冬も耕作ができ、大麦が多く栽培される。また地勢も日本海側とはずいぶん違っている。

地図で見ると、この地方では、わが國の鉄道の幹線の一部をなす東北本線が、わりあいによく南北に通じていることに気がつくであろう。



小岩井農場

それは奥羽山脈と太平洋岸の、阿武隈・北上両山地との間にある大きな横谷や、廣い平野を利用して敷設されている

からである。この地帯は太平洋側で最も重要な生産地で、都市も多く栄えている。おもな都市を地図で調べてみよう。

奥羽地方では、昔から有名な牧馬は、おもに太平洋側で行われている。高原状の阿武隈、北上両山地や、なだらかな大山のすそ野、あるいは北部の台地性の三本木原などには、牧場として好適な草地在る。この地帯は本州の重要な牧馬地帯である。しかし、今後は土地の開墾が進むにしたがって、この牧場にもだんだんに変化が起って来ることであろう。

海岸を見ると阿武隈山地東側は單調で、狭い平地が続き、常磐線がここを通っている。これに対して三陸の海岸は、わが國の中でも代表的なり阿斯式海岸を示し、入江の奥には漁港が方々にひらけている。この辺の海は暖流や寒流の魚類が豊富である。以前には人々はわずかに海岸近くで漁業に従事するにすぎなかった。現在では遠洋漁業も盛んになり、大きく発展した漁港が少なくない。有名な漁港として、どんなものが地図に見出されるであろうか。

奥羽地方の開拓 奥羽地方は人口密度も本州中では最も小さいし、可耕地も他の地方に比べればまだ残されていて、農業の発展の余地も少なくない。またわが國の諸地方では明治以来、近代的工業が盛んとなり、これにともなって諸都市では商業も活ばつに行われるようになった。しかし奥羽地方では、昔からいろいろな家内工業が発達しているにもかかわらず、新しい工業はまだあまり盛んとはいえない。

もともとこの地方の開拓は、本州の他の地方に比べると、はるかに後れて始められたのである。7世紀の中ごろ、太平洋側に陸奥國、8世紀のはじめに日本海側に出羽國がおかれたが、何しろ都から遠く離れた寒い土地であったので、開拓も思うように進まなかった。それにこの地方の開拓に当たっては、はじめは暖い地方で行われて来た農業が、そのまま取り入れられ、いくたびか失敗をくり返した。奥羽地

方の夏はかなり高温となることは幸いであるとしても、その期間は南の諸地方に比べれば短い。例えば奥羽地方各地では、平均 15°C 以上を示す期間がどのくらいか。それは中央日本や西南日本の諸地方に比べて、どのくらい短いかを気温表から判断してみよう。

このような土地では、稲を育てるに当たっても、南の暖かい地方に比べていろいろな苦心が必要となってくる。それにこの地方では、年によって夏の気温が十分に上がらないこともあって、しばしば冷害による凶作に見舞われた。ことに寒流に洗われる太平洋側では、この危険性が多く、悲惨な結果を招いたことも珍しくはなかった。

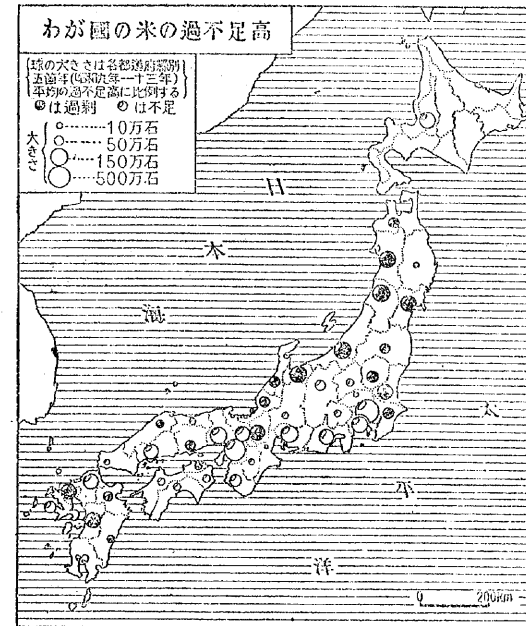
この地方の土地の開拓が著しく進んだのは、江戸時代以後のことである。この時代には各藩がそれぞれ凶年の対策を考えたが、非常の場合のために米を貯えておく郷倉を設けたり、また新しい産業の振興にも努力を拂った。また一方かんがいの普及に力を注ぎ、水田の拡張をよかった結果、米の産額が著しく増大して、他地方へ移出できるまでにいった。ことに仙台藩では河川を改修し、運河を開いて米の輸送をはかったので、石巻は仙台米を江戸へ送り出す港として栄えた。また日本海側では、庄内平野の米は酒田から船によって遠い海上を運んで大阪や江戸に運ばれた。しかしながら依然として冷害にしばしば見舞われた。

明治になってからは、稲に関する科学的研究が始められ、寒さに強い新しい品種が次から次へと作り出された。これによって全地域にわたって米作が可能となり、その収穫もかなり安定した。産米高も現在では明治初年に比べると2倍に達し、多量の米を他地方へ移出して、わが國の重要な食糧補給地の役目を果たしている。

米産についてこのような努力が拂われてきた一方、この地方の冷涼な気候に適応する特殊な産業も起って来た。例えば津軽平野のりんごの栽培は、明治初年に始められたが、今日では青森縣のりんごの産額

は、わが國の3分の2ぐらいいをめているし、山形・福島2縣の櫻桃も特産である。各縣のじゃがいもの産も増加して、総産額は北海道に次ぐようになり、その他、冷涼な地方に適する野菜の栽培も試みられている。それにこの地方には、秋田油田、小坂その他の金・銀・銅、釜石の鉄、

常磐炭田などをはじめ多くの鉱産地もあり、林産も豊かである。しかもそれらの開発はまだ十分ではない。したがって本地方の産業はいろいろな点で将来性がある。



課題

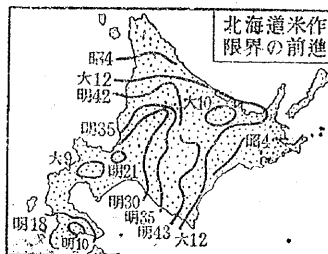
1. 郷土では道路や鉄道は地勢をどのように利用して設けられているか。奥羽地方の日本海側の鉄道は地勢をどのように利用しているか。また太平洋側と日本海側とはどのような鉄道によって連絡されているか。
2. 奥羽地方の暑さ寒さの年変化状態を1月と7月の等温線図や気温表から判断して、これを西南日本や郷土のそれと比べること。
3. 郷土の特産業で地勢や気候をよく利用しているものをあげること。

4. 奥羽地方のおもな天然資源その開発状態及びそれぞれの重要性について調べる。

(2) 新しい開拓地、北海道

開拓のはじまり 北海道はわが國の北端にあるので、氣候も奥羽地方よりも更に冷涼である。そしてこの地方が開かれるようになったのは、つい先ごろのことにすぎない。日本の開拓は南からだんだん北に向かって進み、北海道に及んだのは、江戸時代の中ごろからである。そのころは水産業に関連して、西部の半島の沿海地方や一部の海岸地帯が開かれていたにすぎなかった。そして本島が農業地として奥地まで開拓が進んだのは明治になってからである。この奥地の開拓にとって屯田兵制度は大きな役割を果たした。

この地方は寒い氣候のために暖い地方の農作物が、よく育たないし、この土地の寒い冬の生活になれない人々には、定着がなかなか困難であった。そこで、明治2年に北海道開拓使という役所を置いて、北海道の自然に合った開拓を進めることになり、アメリカからケブロンやクラークなどの人々を顧問に招いて、新しい北海道の開拓に手をつけたのである。寒い土地に應じた作物や、農機具、有畜農業のことなどを、その時にはじめて学んだ。その他まず道路や鉄道を開いたり、鉱山の開発などを行って、土地の開拓を進めていったことなども、他の



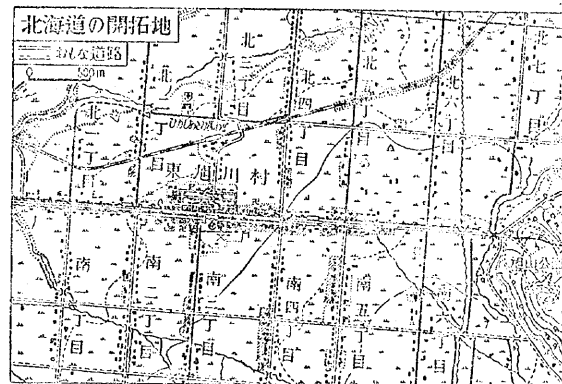
地方ではあまりやらなかったことである。

最初は畑の作物が多かった。ところが明治の中ごろになって、石狩平野や上川盆地のように、夏の気温が高くなるところで、米作が成功してから、これが重要視され

るようになった。このため北海道には、寒い土地に適した畑作と、暖い土地で行われる米作とが、共に歩調をそろえて進むようになった。米作発達のおかげには人々の苦心のあとがつつられている。そして幾度も品種の改良が行われて、だんだん全道にひろまって来たが、今日でも、なお安定しないところが多い。例えば凶作であった昭和10年(1935)には、東部北海道では全く収穫できなかったところも多かったくらいである。

半島部と石狩平野 地図を開いてみると、北海道は、石狩平野を挟んで、西の半島部と東の主部とから成っていることに気がつくであろう。

半島部は本州に近く、早くから開けた所で、とくにその西海岸の地



方では、水産業が開拓のさきがけをなした。半島部は一ばんに山勝ちで内浦湾を開拓所は

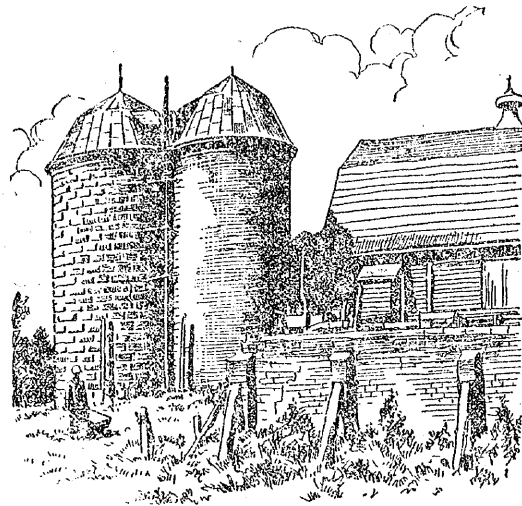
火山の風景美に富んでいるが、農耕にはよい土地が少ない。それで、はじめは盛んであった、にしん漁業がふるわなくなってから、これにかわるような産業が発達しなかった。そのために、江差・岩内などの漁業者の数は、だんだん減少した。

これに対して石狩平野は北海道の心臓部である。開拓は明治になってからであるが、廣い平野で、農業を行うによい地域である。また北

海道開拓の中心地が札幌に定められたから、新しい開拓の村が計画的にあとからあとからと生まれた。

石狩平野には低湿の土地が多い。ここへも明治のはじめころに、たくさんの人が入植したが、定着できなかった。しかし、今では河川の改修や排水工事などによって開拓が進んでいる。低地より一段と高い台地とか、湿地になっていない平地のところは、開拓もはじめて成功した。

石狩平野には水田も増加して来たが、畑作が中心であって、そこでは豆・からす・じゃがいもをはじめ、家畜の飼料になる作物などが



酪農地方の農家

酪農を行っている農家の特色である。

地図でみると、石狩平野のすぐ東の方には名寄・上川・富良野の3つの盆地が南北に並んでいる。ここでは夏の高温を利用して、水田が

作られ、都市に近いところには、近年野菜畑が多くなって来た。また、酪農がよく発達して、乳牛からしぼった生乳が、近くの製酪工場へと運ばれる。赤れんがや石造のサイローが立ち並んだ風景も、

つくられているが、名寄盆地では冷害がはなはだしいので、米作からじゃがいもの栽培に変わったところも少なくない。これは開拓がまだ土地がらに、じっくり適應するまでに至っていないことを表わすものである。

石狩平野から北の方の海岸地方に行くと、留萌・増毛などのにしん漁業の中心地があって、漁獲物はここから全国へ送られる。けれども近ごろは、にしんの漁場がだんだん北の方へ移って行くのは、どうしたわけであろうか。また減少して行くにしんを増殖させるにはどうすればよいか、などについて真剣な研究が進められている。

石狩平野の東には石狩炭田があって、ここの石炭は室蘭・小樽を通じて本州へ運ばれ、わが國の工業の重要な原動力にもなっている。この石狩炭田が北海道の開拓にどんなに役立ったかはように想像されよう。また、この中央の山地には寒帯性の美林が廣く、パルプや紙の原料として、ますますその重要性を加えて来た。苫小牧・江別は製紙工業の中心地である。

東部北海道 北海道の中央部を蝦夷山脈が南北に走っており、これによって北海道は東西に分かれる。この中央山脈の南東には廣大な十勝平野がある。氣候や、地味からいって穀物ばかりの農業を行うことはむずかしい。そこで、混同農業といって家畜と農作物とを、ほどよく組み合わせた農業を行っている。だいず・てんさい・じゃがいもなどの畑が見渡すかぎりつづいているが、まだ開拓のできる土地が、たくさん残されている。

十勝から釧路・根室の海岸地方には、濃霧が多いので、農作物はこれによってどのくらい害をうけるかわからないほどである。だから開拓地は奥地の高台に集まっているところが多い。耕地の中に木の株が高く残っている開拓地が方々に見られるが、ここは牧畜を主体とする農業でないと開拓が進められない。しかし近海に、たら・こんぶなど

北見の海岸地方は、北海道としてもわりあい古い開拓地であるが、はじめのころは、水産業や砂金の採集、マッチの軸木の製造などがおこなわれていた。そして奥地の方は交通が便利になってから人々がはいっていったのである。この地方にも、これからの開拓を予定されたところが多い。この地方には濃霧の害は少ないが、年によって豊作と凶作との差がはげしく、冷害の年には全く収穫がないところが一般である。昭和になってから酪農を発達させたり、寒さに強い加作物を奨励したため開拓が、だんだん進んで来た。

北海道の開拓は、これからである。この地方の特色である豊かな水産・林産・鉱産にも開発の余地が残されているし、農牧業もこの土地の自然に適した進み方をするようになってから、まだ日が浅い。そこで新しく開けたこの土地の今後の躍進が大いに期待されている。

1. 第 57 ページの図によって北海道の開拓のありさまが、わが国その他の地方の農村と、どのような点で違っているかを読みとること。
2. 世界の米作地の分布を調べること、北海道はその中でどんな位置を占めているであろうか。
3. 北海道はどのような天然資源に恵まれているか、それらはわが国にとってどんな重要性を持っているか。
4. 寒冷な地方の冬のスポーツについて調べて、その話を学級ですること。

— 63 —

各地の気温表 (c)														
地名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	全年	
鹿兒島	6.9	7.4	10.8	15.4	18.9	22.4	26.3	26.8	24.2	18.9	13.7	8.9	16.7	
熊本	4.5	5.3	9.0	14.4	18.5	22.4	26.3	27.0	23.4	17.2	11.5	6.5	15.5	
福岡	4.9	5.1	8.2	13.1	17.2	21.4	25.3	26.4	22.2	16.3	11.5	7.1	14.9	
大分	5.3	5.4	8.2	12.9	17.1	21.1	25.3	26.0	22.6	17.3	12.1	7.6	15.1	
松山	4.7	4.9	7.9	12.9	17.1	21.4	25.7	26.4	22.8	16.8	11.8	7.1	15.0	
高知	5.3	6.0	9.5	14.5	18.2	21.6	25.3	26.1	23.2	17.7	12.4	7.4	15.6	
浜田	5.2	4.9	7.6	12.2	16.3	20.4	24.7	25.7	21.7	16.3	12.0	7.7	14.6	
廣島	3.9	4.3	7.6	12.8	17.2	21.3	25.6	25.8	22.8	16.7	11.0	6.2	14.7	
徳島	3.8	3.8	6.3	12.0	16.3	20.8	25.1	26.1	22.1	16.9	11.3	6.6	14.3	
岡山	3.5	3.9	7.1	12.7	17.4	21.6	26.0	26.9	22.9	16.5	10.7	5.7	14.6	
京都	2.7	3.2	6.4	12.2	16.8	21.2	25.5	26.3	22.3	15.8	9.9	4.9	13.9	
大阪	4.2	4.4	7.8	13.2	17.7	21.9	26.2	27.3	23.4	17.2	11.6	6.7	15.1	
神戸	7.1	7.4	10.1	14.6	18.3	21.4	25.2	26.0	23.6	19.0	14.6	10.0	16.4	
名古屋	3.0	3.6	7.4	12.9	17.4	21.5	25.7	26.5	22.7	16.4	10.6	5.4	14.4	
三島	4.2	4.5	8.1	12.6	17.3	21.0	25.1	25.5	22.1	16.4	11.5	6.8	14.6	
東京	3.1	3.8	7.0	12.6	16.8	20.6	24.4	25.7	22.1	16.1	10.7	5.4	14.0	
水戸	1.9	2.5	5.5	11.0	15.3	19.1	23.1	24.4	20.9	15.1	9.5	4.2	12.7	
金沢	2.4	2.3	4.3	11.0	15.7	20.1	24.3	25.6	21.5	15.4	10.1	5.2	13.2	
松本	-2.0	-1.6	3.4	9.1	14.1	18.7	22.8	23.0	18.7	11.9	6.2	1.1	10.4	
宇都宮	0.7	1.6	5.0	11.0	15.5	19.7	23.6	24.5	20.8	14.6	8.5	3.0	12.4	
新潟	-1.5	1.5	4.5	10.2	14.9	19.5	23.9	25.6	21.4	15.4	9.7	4.3	12.7	
山形	-1.7	1.3	3.0	8.9	14.3	19.1	23.1	24.1	19.4	12.9	6.5	1.1	10.7	
仙台	-0.4	0.0	3.4	8.7	13.6	17.7	22.2	23.6	19.5	13.7	8.2	2.6	11.1	
宮古	-0.7	0.4	3.6	8.2	12.4	16.0	20.2	22.2	18.5	12.7	7.3	2.2	10.1	
秋田	-1.6	1.3	2.0	8.3	13.2	18.1	22.2	23.9	19.2	12.7	7.0	1.4	10.4	
青森	-2.8	-2.3	0.6	6.9	11.8	16.3	20.7	22.8	18.4	12.6	5.9	0.1	9.2	
函館	-3.0	-2.4	0.6	6.3	10.3	14.5	19.0	21.5	17.8	11.8	5.7	0.2	8.5	
札幌	-6.3	-5.3	-1.5	5.3	10.5	14.9	19.3	20.9	16.3	9.8	3.3	3.1	7.0	
旭川	-9.9	-8.8	-3.9	3.7	10.2	15.5	19.7	20.4	14.9	7.8	1.1	-5.6	5.4	
根室	-5.0	-5.6	-2.3	2.8	6.5	9.9	14.3	17.2	15.3	10.7	4.6	-1.4	5.6	
稚内	-6.6	-6.2	-1.2	3.8	8.1	11.8	16.4	19.3	16.2	10.2	3.3	-2.8	6.0	
北平	-4.5	-1.8	4.7	13.3	20.4	25.7	28.8	28.8	24.0	18.4	12.1	6.1	16.8	
ロンドン	4.3	4.6	6.0	8.4	12.0	15.1	17.0	16.5	14.0	10.1	6.6	4.8	10.0	
ヴェルサ ヤンスタ	-48.4	-42.9	-29.6	-12.5	2.0	13.6	15.9	11.1	2.2	-13.9	-35.7	-46.1	-15.4	
バタビア	25.7	25.6	26.0	26.5	26.6	26.3	26.1	26.3	26.6	26.7	26.4	25.9	26.2	

各地の雨量(降水量)表 (mm)														
地名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	全年	
鹿兒島	79	102	155	218	213	389	290	194	217	129	90	82	2158	
熊本	58	74	122	163	156	337	295	166	164	105	70	60	1770	
福岡	67	80	106	129	120	249	241	145	194	102	77	79	1589	
大分	44	70	114	135	145	233	228	163	219	144	66	49	1612	
松山	50	59	91	122	130	202	163	105	172	107	72	62	1335	
高知	63	101	188	269	270	335	320	320	399	213	116	77	2671	
浜田	107	99	114	126	115	203	175	122	203	133	106	118	1613	
廣島	48	64	107	161	146	247	213	112	188	113	66	53	1515	
徳島	197	156	139	126	107	170	163	134	235	188	153	203	1942	
岡山	35	49	77	92	103	164	136	98	152	93	54	39	1099	
京都	55	67	107	149	141	232	192	147	199	127	81	55	1552	
大阪	44	59	96	134	125	191	148	112	179	123	76	49	1339	
神戸	72	111	167	204	216	304	219	278	330	301	157	93	2452	
名古屋	52	69	114	152	152	213	182	168	235	158	87	55	1637	
三島	54	82	124	153	137	220	214	221	269	191	112	81	1858	
東京	50	74	109	134	151	170	141	155	238	197	98	57	1568	
水戸	46	68	105	134	145	157	145	146	204	175	92	53	1470	
金沢	277	187	166	164	135	169	203	158	236	202	269	345	2517	
松本	39	48	73	87	92	143	129	109	161	111	55	41	1087	
宇都宮	34	56	91	123	150	190	217	287	235	142	71	38	1634	
新潟	193	127	108	105	90	114	161	118	178	160	193	228	1775	
山形	98	75	74	75	81	97	140	142	142	97	87	116	1224	
仙台	36	43	62	109	98	125	147	125	160	118	64	39	1126	
宮古	62	72	82	130	108	117	129	163	218	154	80	59	1344	
秋田	130	104	105	110	111	127	191	186	195	173	187	164	1789	
青森	145	108	83	68	73	80	135	119	139	113	141	161	1366	
函館	67	61	68	71	84	90	137	134	173	118	108	80	1188	
札幌	87	70	62	57	62	66	93	108	136	113	108	97	1059	
旭川	73	52	54	54	67	78	118	125	145	111	109	102	1088	
根室	38	28	61	77	94	95	103	107	147	104	86	57	997	
稚内	64	55	84	85	76	72	109	114	182	127	130	133	1231	
北平	10	92	4	11	44	133	171	124	68	12	6	4	586	
ロンドン	48	40	40	45	46	54	65	57	54	65	58	57	629	
ヴェルサ ヤンスタ	4	5	3	1	8	18	23	24	13	12	8	3	125	
バタビア	308	312	200	151	103	87	60	40	69	112	137	212	1770	

各地の霜の季節と雪の季節(平均)							
地名	初霜	終霜	初雪	終雪	初霜	終霜	初雪
鹿兒島	XI 24	III 24	I 6	II 24			
熊本	XI 6	IV 13	XII 21	III 2			
福岡	XI 10	IV 20	XII 23	III 5			
大分	XI 27	III 31	XII 20	III 3			
松山	XI 14	IV 15	XII 19	III 10			
高知	XI 24	III 25	XII 31	II 27			
浜田	XII 2	IV 11	XII 11	III 18			
廣島	XI 18	IV 7	XII 10	III 17			
岡山	XI 13	IV 23	XII 8	III 21			
岡山	XI 8	IV 16	XII 15	III 17			
京都	X 31	V 1	XII 10	III 24			
大阪	XI 13	IV 9	XII 24	III 16			
名古屋	XII 21	III 8	I 9	II 22			
名古屋	XI 6	IV 14	XII 15	III 15			
名古屋	XI 13	IV 7	I 13	III 2			
東京	XI 13	IV 6	XII 23	III 21			
水戸	XI 1	IV 25	XII 22	III 25			
金沢	XI 17	IV 15	XII 2	III 30			
松本	X 18	V 13	XI 24	IV 8			
宇都宮	X 28	V 1	XII 15	III 23			
新潟	XI 22	IV 9	XI 27	IV 1			
山形	X 21	V 8	XI 27	IV 8			
仙台	X 30	V 2	XI 27	IV 5			
宮城	X 25	V 2	XI 20	IV 8			
秋田	X 23	IV 29	XI 12	IV 7			
青森	X 23	V 5	XI 8	IV 12			
函館	X 13	V 13	XI 5	IV 17			
札幌	X 3	V 20	X 31	IV 21			
旭川	X 3	V 24	X 24	V 4			
根室	X 12	V 23	XI 7	V 4			
稚内	X 22	IV 13	X 14	V 6			

社会科学
わが国土
Approved by Ministry of Education
(Date Oct. 27, 1948)

(昭和二十四年度第一次発行)

昭和二十二年九月十一日 印刷発行
昭和二十三年一月三十日 再版印刷
昭和二十三年十二月二十五日 修正印刷
昭和二十四年一月十日 修正印刷
(昭和二十四年一月十日 文部省検査済)

著作権所有 文部省

印刷所 東京都北区堀船町一丁目八五七番地 東京書籍株式会社
代表者 長 得一

発行所 東京都北区堀船町一丁目八五七番地 東京書籍株式会社

開き不良

K250.3-1-1

